

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-22

フランスの挿絵入り新聞「イリュストラシオン」から見た日仏近代：法政大学創立者薩埵正邦生誕150周年記念連続講演会-明治日本の産業と社会-第9回講演録 (Working paper series ; no.40)

朝比奈, 美知子 / ASAHINA, Michiko

(出版者 / Publisher)

法政大学イノベーション・マネジメント研究センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学イノベーション・マネジメント研究センター ワーキングペーパーシリーズ / 法政大学イノベーション・マネジメント研究センター ワーキングペーパーシリーズ

(巻 / Volume)

40

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

45

(発行年 / Year)

2007-09-03

朝比奈 美知子

法政大学イノベーション・マネジメント研究センター 編

フランスの挿絵入り新聞「イリュストラ
ション」から見た日仏近代

法政大学創立者 きつたまさくに 薩埴正邦生誕 150 周年記念連続講演会
—明治日本の産業と社会—
第 9 回 講演録 2006 年 6 月 30 日(金)

2007/09/03

No. 4 0

Michiko Asahina

Modern Age between France and Japan:
How a Picture Newspaper "Illustration"
saw Meiji Era

In Commemoration of the Founder of Hosei University,
SATTA Masakuni and his 150th Birth Anniversary

September 3, 2007

No. 40

法政大学創立者・薩埵正邦生誕 150 周年記念連続講演会—明治日本の産業と社会—
第 9 回

朝比奈美知子（東洋大学文学部教授）

「フランスの挿絵入り新聞『イリュストラシオン』から見た日仏近代」

○司会者（洞口） 本日は、朝比奈美知子先生にご講演をいただきます。皆さまご存じのとおり、法政大学には、お雇い外国人でありますボアソナード博士が日本に近代的な法制度を広めるためにいらっしゃったわけですが、そのボアソナードを公私にわたって支えたのがフランス語のできる薩埵正邦先生でした。日本語のできないボアソナード博士は、さぞかし不自由な思いもされたのではないかと思います。法政大学の創立は1880年ですので、その前後、明治10年代の日本社会というものを背景に、我々の法政大学が創立され、その法政大学が今あるがゆえに、我々は今ここでこういう仕事をしているということになるわけです。

きょうは、朝比奈先生が研究の対象にしていらっしゃいます挿絵入り新聞「イリュストラシオン」の解説を通じて、当時のフランス人が日本社会をどのようにみていたのかということを変更して評価するひとつのきっかけになればと思います。

いただいた資料に目を通しましたがけれども、100年以上前のフランス語新聞から日本語に訳し起こされているわけですが、まずその達意の日本語といたしましうか、訳というのが非常にすばらしい訳になっていまして、この水準でフランス語から日本語に訳することができる人というのは、日本にもそれほど多くはないのではないかと思います。

そして、昔の新聞記事と格闘していらっしゃる朝比奈先生という方は、多分時間をかけて、時間を超えて、時空間を超えて、日本とフランスと、その両方の国の見方というものを提示していらっしゃるのだと思います。

前置きが若干長くなりましたけれども、朝比奈先生にご講演をいただきたいと思えます。よろしく願いいたします。

○朝比奈 東洋大学の朝比奈でございます。きょうは蒸し暑いところ、どうもありがとうございます。

0. 「イリュストラシオン」とは

きょうは、フランス19世紀の挿絵入り新聞『イリュストラシオン』から見た日仏近代というテーマでお話をさせていただきます。実は私は文学を専門にし、19世紀という時代を守備範囲にしておりますが、社会科学であるとか日本史に決して精通しているわけではございません。あるきっかけで、美術史・比較文化史研究家の増子博調氏から、『イリュストラシオン』という新聞に多数の日本関係記事が掲載されており、それらをまとめた資料が横浜開港資料館によって編まれているとのご教示をいただき、さらにそれらの翻訳についてのお話をいただきました。増子氏の多大なご協力、また横浜開港資料館のご厚意を得て翻訳の作業を進め、私の本務校である東洋大学から出版助成を得て、2004年に東信堂より『フランスから見た幕末維新』という翻訳を出版することができました（増子氏は、同書の中でも解説の部分を担当してくださっております）。この発表の資料は、同書によるものです。ただし、この発表前に、若干の改変を加えたところもございます。

この「イリュストラシオン」というフランスの新聞を通じて日本の文化をみるということは、私たち自身の国日本についてあらためて考えてみるという機会を与えてくれると同時に、日本を論じている当のフランスという社会のあり方についても考えるという、文化考察の二面性を含んだことであろうかと思えます。

また、新聞を通じてある国の文化をみるということは、例えば有名な歴史書であるとか、小説であるとか、美術作品などといった、いわば王道に位置しているような作品からというよりも、むしろ一般大衆に文化というものがどのような形で浸透していたかということを知ることにつながります。特にきょうは日本ということがテーマですので、日本という異文化が当時のフランスの大衆にどのような形で受け入れられてきたかを見るというのが、きょうの興味かと思えます。

まず、「イリュストラシオン」にあらわれた日本像をみていく前に、「イリュストラシオン」という新聞について、恐らくここにいらっしゃってくださっている皆さんは余りご存じでない方が多いかと思えます。まず、この新聞というのはまずどのようなものか。また、この新聞を生んだ背景というものはどのようなものかということを一言で、ここで整理しておきたいと思えます。

図版資料の一番最初につけましたのが創刊号の表紙です。ただ、これは実物大ではございませんで、実物はこれより少し大きいB4判のサイズになっています。

創刊は1843年です。翻訳の際には、記事が膨大なものですから、創刊号からとりあえず1900年までに区切ってみました。その時代の背景を整理してみると、これはフランスにおいて資本主義が発達してきた時代です。資本主義といういろいろな要素があるのですが、マスコミということで考えれば、多数の新聞、雑誌がまさにこの時代に創刊されたのですね。今、私たちが新聞で記事を読んだり、雑誌を読んだりということは当たり前のようなことに思えますけれども、それがあらわれて盛んにな

ってきたというのはちょうどこの時代のことです。「イリュストラシオン」というのもそういった時代の波に乗って発展した雑誌です。

いろいろな雑誌が出て、発行部数が拡大すると同時に、読者層も拡大してまいります。それによって文化というものが一部のエリートのものでなくて、大衆に向けて発信される、いわば文化の大衆化という現象が起こってきた。そして、それがどんどん加速されていく。そういう時代にできた新聞です。

また、この「イリュストラシオン」ができた時代といいますのは、異国、異文化への興味が非常に強まった時代です。それはフランスをはじめ欧米の列強が植民地を経営したり、あるいは帝国主義を進めていったり、そういう動きが強まる中で、副産物のようにいろいろな異国の風物が国に紹介されて、それがまた新聞、雑誌といった大衆に訴えるマスメディアを通じて大衆の興味を拡大していった時代です。

では、この「イリュストラシオン」という新聞がどのような新聞であるかということ整理しておきます。

まず、「イリュストラシオン」の創刊は、さきに申し上げたとおり、1843年です。新聞の題名の「イリュストラシオン」というのは、英語読みすれば、「イラストレーション」でして、その名のとおり、非常に豊富な挿絵が掲載されていることで特徴的な新聞です。この発想は、残念ながらフランスのオリジナルというわけではなく、前年すなわち1842年にイギリスで創刊された「イラストレイテッド・ロンドン・ニュース」からヒントを得たものです。「イラストレイテッド・ロンドン・ニュース」は大当たりを博し、その評判にあやかる形で、フランスでも同様の新聞が創刊されたのです。

また、この新聞は、「総合新聞 journal universel」、という肩書ももっておりまして、政治、外交、軍事などといった、新聞の王道ともいうべき記事はもちろん充実していますが、それに加えて、文化記事や外国の情報など非常に多方面にわたる記事を掲載している新聞です。また、文化記事、外国の情報といいましても、いわゆる正統的な文化ばかりではなくて、街で流行っているものが何であるかとか、外国のものが日常生活にどのように入ってきているかといったようなことも、かなり細かく掲載している新聞です。

そして、この新聞ですけれども、読者層としてはリベラルなブルジョア層ということになっています。フランス革命が起こったのは、この「イリュストラシオン」の創刊の50年以上前、1789年ですが、それ以来、フランスではいろいろな社会の変動がありました。この19世紀に一番勢力を伸ばしてきたのはブルジョア層です。「イリュストラシオン」というのは、そういった、いわば革命の恩恵を受けて、身分制度の制約から解放され、なおかつ経済の発展というものを享受できるようになったブルジョア層、その中でも思想的にはリベラルな人々を主な読者層として想定している新聞です。この新聞の性格というのは、これから皆さんと読んでいく記事にあらわれてくるかと思えます。

扱われる日本記事についてですけれども、一応私も原典を参照して、掲載されている記事のテーマを拾ってみたのですけれども、例えば日本で大事だと思われる事件が幾つも落ちているということもありますし、あるいは、ある時代には日本のことが盛んに出てくるけれども、ある時代になると、はたと出てこない、つまりフランスにとって興味のある事柄があらわれたときのみに記事が書かれている、というような現象が見受けられます。ですから、日本の歴史を見るという観点からみると、網羅的というにはほど遠く、ある意味では恣意的とも思われるような内容選択と見えるかもしれない、ということをお断りしておきます。

それでは、この「イリュストラシオン」にあらわれた日本像を、非常に駆け足になりますが、みていきたいと思います。その際に、一応3つの区分でこの時代を区切りたいと思います。1つは、日仏交流の黎明期。これは鎖国から開国・開化へと向かっていった日本の様子を映した時期で、1870年代の前半ぐらいまでです。2番めとして、1870年代後半期から1890年ぐらいの時期。異文化に対する興味——ジャポニスムが隆盛を迎えた時代です。この時期には文化記事が中心になってきます。最後に、1890年代以降の近代国家日本の発展に関する記事を見ていきます。これは日清・日露の両戦争の周辺の事情を報じたものが中心になります。

1. 日仏交流の黎明期

まず、第1番目の黎明期、鎖国から開国・開化へという動きです。この「イリュストラシオン」という新聞に初めて日本の記事が載るのは1847年のことです。1月1日に、来週日本のことをいうというように予告記事が出るのですけれども、その前の46年の7月にセシーユという帝国が率いるフランス艦隊が長崎に立ち寄ったというエピソードが挙げられています。これは本当に長崎に上陸したわけではございませんで、鎖国中で、停泊を命じられて、ただ物資の補給などは受けるのです。その記事は、日本人がフランス艦隊を偵察しにやってきたが、役人の一人一人はフランスの船の機械や兵器などあらゆることにきわめて強い興味を示した、また、彼らは意外に開放的であるというような内容になっております。

この時代の日本の状況を一応ここで整理しておきますと、1853年にアメリカのペリーが浦賀に来まして、開国を迫ります。そして、54年には日米和親条約が調印され、それから堰を切ったように欧米の列強が日本と和親条約を結ぶようになります。

これから引用ならびに図版資料にしたがってお話させていただきます（引用・図版資料は、巻末にまとめて掲載。なお、引用に付した題名は、内容が把握しやすいように朝比奈がつけたもの。）が、ここに出ています挿絵はすべて、雑誌に出たときにはもっともっと大きいものです。この3倍から4倍のサイズ、場合によっては全面の挿絵になっている場合もございます。非常に大きいものを便宜上縮めたものです。

まず引用1「ヴィルジニー号の函館訪問」（図版①）。これは、1856年に函館を訪れ

たヴィルジニー号という船の記録です。何はともあれ、少し読んでみます。線を引いたところだけを読みます。我々は「どこにでも行くことができました。今なお効力を持つタイコーサマの命令が、ヨーロッパの侵略の流れに抵抗して 300年にもわたり守ってきた日本というこの国において、これは驚異的なことではないだろうか？ 今日ではその古びた〔鎖国の〕障壁はずいぶん揺るがされている。しかしそれらはいつ廃棄されるのか」。数行ですけれども、この記事に象徴されますように、何といたってもフランスの艦隊にとって（そしてほかのいろいろな艦隊にとっても）、一番の関心事は、やはり日本における鎖国のことです。日本が長きにわたって国を閉じてきたことが、非常に不思議なもの映っているということです。

例えば引用 5 「薩摩藩邸焼き討ち」（図版④）。これはまた後で別の面でも解説をさせていただきますけれども、その中でも、引用の線を引いたところで、「かつては野蛮だった国々が近代的な進歩へと急速な歩みを遂げているあいだに、日本はいわば、自身の傲慢な無知の中に結晶のようにこり固まっていた」というような記述もごさいます。

また、引用 2 「開国の意味：文明化」をみていただくと、鎖国というものがいつかは崩れるのだという信念をフランスはもっているようです。「正義と真実という打ち負かすことのできない理念に抗おうとするときには」（つまり、理念にあらがって鎖国を続けようとするときには）、「乗り越えがたい障害に出会う。人間社会の進歩は、神の摂理に基づく法則ではないだろうか」というような言い方をしています。

これらからわかることというのは、フランス人が日本の鎖国を見る際の 1 つの重要なポイントは、「文明化」、あるいは「進歩」という概念です。「進歩」こそは、19世紀の、資本主義が発達した世界を支えてきた理念です。さらにフランスという国は、昔から、自身が西洋のルーツであるギリシャ・ローマの文明の継承者であることを誇りとし、自分が継承しているすばらしい文化、自分が体現している文明というものを世界じゅうに広げることが自身の使命であるというような意識を持っております。文明化 civilisationは、フランスという国のアイデンティティを支える 1 つの標語のようになっているとさえ言えるのであり、経済、あるいは軍事など以上に、この文明化ということを重視しているフランスの姿勢が、日本の鎖国をめぐる記述からもうかがわれます。

引用 1 に戻りますけれども、ここで下線を引いているところを読みたいと思います。「フランスは、ロシアのように征服するのではなく、アメリカ合衆国のように商売をするのではなく、イギリスのように植民もしない。そうではなくフランスは、聖フランシスコ・ザヴィエルの偉業を引き継ぎ、血の海の中にあれほど気高く失われたカトリックの栄光をふたたび取り戻す宣教師団の祖国となることで満足すべきなのだ」という節がごさいます。ご存知のとおりポルトガル人ザヴィエルが日本に来てからキリスト教が広まりますが、キリシタン弾圧は非常に厳しいものがございました。その

ことをいっているのですね。フランスの立場として、通商といったこと以上に欠くことができない立場として、カトリックの伝播者であるということは非常に重視すべきことであるようです。これらが実はフランスを支える理念になっています。

経済、あるいは植民という観点からみると、極東への進出においては、フランスは諸外国に比べてかなり遅れをとったといえます。アメリカはもちろん、イギリス等々に比べましても、この極東への進出では、どうもうまくいってないようです。「我々はあまり植民をすることがうまくない民族であるようだ」というようなこともこの新聞で実際にいっています。しかしながら、それを補って余りあるようなフランスの役割というと、これは文明化であり、またキリスト教を伝えることなのだというのです。

これはある意味では建前にすぎないかもしれないのですけれども、例えば先ほど引き合いに出しましたイギリスの「イラストレイテッド・ロンドン・ニュース」などの記述をみますと、キリスト教に関しては、非常に淡白な記述が多いです。日本も含めてイギリス人が訪れた外国の風景は事件については満遍なくいろいろなことを報じていますが、宗教、あるいは理念に関しては非常に淡白であるという印象を、私は受けました。それに比べて、フランスの記事における文明化、カトリックへの重点の置き方は、かなり重いものがあると思います。

では、フランスがそうやって入ってきて、徳川体制下の日本をどのようにみていたのでしょうか。引用4「徳川体制下の日本：厳格な身分制度、武士・役人の傲慢さ」をごらんください。ここでは、「名誉の問題、大名や役人らの間で非常に名誉が重視され、侮辱を受けた者は直ちに自害することで、自分自身の臆病をみずから罰しなければならない」とあります。すなわち、皆さんご存じの切腹ですね。やはり切腹というのは、フランス人にとってかなりショッキングなことであったようです。ただ、この切腹（これについてはまた別の記事を少しみていきます）もさることながら、それにもまして、厳格な身分、あるいは名誉の意識というのは問題視されるべきものと映ったようです。

また、同じ記事の中で、「日本の公務員のほとんど軍隊的な傲慢さは、ヨーロッパとの通商に大きな困難を引き起こしている。じっさい、税関はそうしたヤクニンたちによって支配されている。彼らは商取引に関しての全権を握っており、すでに決まった取引をぶち壊してしまうことさえできる。それに加えて外国人は、民衆には好かれているが、日本の支配階級——つまり武士——からは、ブルジョワジーとプロレタリアートの共感を得ているというまさにその理由により毛嫌いされている」、というようなことをいっています。

ここでは、「ブルジョアジー」と「プロレタリアート」という用語が出てきますが、これはやはりフランス革命を起こしたフランスならではの記述です。とくに、「イリュストラシオン」という新聞の読者層が革命によってかなりの権利を得た層であってみれば、革命を肯定し、民主的な身分差のない社会を望むというスタンスは当たり前の

ことであり、この姿勢はこの新聞の隅々に出てきています。

さて、この徳川体制下の日本では、外国人を一たん受け入れて開国はしたものの、当然そのことに反対する運動、すなわち攘夷運動というのが起こってきます。この攘夷運動の主なものとしては、薩摩藩士が英国人を惨殺した生麦事件とそれに対する賠償問題から起こった薩英戦争、下関で起こった長州戦争などが挙げられます。

薩摩も長州も最初は攘夷運動の先頭に立っていたわけです。ただ、この生麦事件、あるいは長州戦争で、いわば攘夷運動の矢面に立って実際に海外と戦火を交えてみて、薩摩・長州は、これでは、今のままでは外国には決して勝つことができない、急速に日本も近代化を進めるべきだということを痛感し、急速に倒幕派の方にむしろ傾いていくわけです。

しかしながら、もちろん攘夷の動きというのはいつでもあるのでして、例えば、引用5にある「薩摩藩邸の焼き討ち」(図版④)などというのは、1868年で、大政奉還の周辺です。大政奉還に至るまでにはいろいろな経緯がありましたけれども、結局やはり倒幕派、あるいは開国派の勢力には打ち勝てないと悟った将軍慶喜は、帝(ミカド)＝朝廷に権力を再び預けるという形で退位をいたします。

薩摩は倒幕の先頭に立っていたわけですがけれども、その薩摩に対する攘夷派の風当たりというのは非常に強いものがありました。この薩摩藩邸の焼き討ちというのは、そういった攘夷派の不満があらわれた事件です。図版の④をごらんください。少し小さくなってしまっていて、なかなかごらんになりにくい点もあると思うのですがけれども。

「イリュストラシオン」では、この薩摩藩邸の焼き討ちについて伝えると同時に要約すれば、徳川の統治について、つぎのような記述をしています。「ゴゲン・サマ[権現様]と呼ばれる日本の貴族[＝徳川家康]が、ミカドの世上権を尊重しながら、あるいは、より事実にもとづいた説明をするなら、ミカドに権力の幻影を保持してやりながら、この混乱を収めようとした」。

ここでフランスの新聞が目しているのは、権現様(家康)を開祖とする徳川とミカドという二重体制の存在です。実はこの二重体制の存在というのは、ヨーロッパにとっては非常に混乱を招くものとして映ったようです。初め開国を迫ったときの日本の支配者は当然幕府でした。ですから、フランスも最初は幕府に働きかけをします。アメリカも当然そうです。ところが、開国、あるいは倒幕運動を経て、大政奉還を経て、明治維新が起こってくると、その国の権力者というのが今度は実質的にミカドへと移っていくわけです。このミカドと将軍という二重の権力の存在は、外国人にとって非常に混乱になりまして、フランスは最初は幕府側に接近していたらしいです。後でお話することになりますが、幕府は、軍隊を近代化しようという意図でもってフランスの軍事顧問団を招聘しましたが、その軍事顧問団がこの薩摩藩邸の焼き討ちにも一役買ったらしいともいわれております。そんな非常に混乱した時代です。

また、それと同時に、この「薩摩藩邸の焼き討ち」記事の少し下の行の方をみてみ

ますと、日本における身分制度などについてつぎのように書いてあります。「しかしながら、これほど何世紀にもわたり自身の殻に閉じこもっていた文明にいきなり受け入れられた外国人は、必然的に、日本人が侵すべからずと信じ込んでいる多くの馬鹿馬鹿しい偏見にぶつかることになった。たとえば、ヨーロッパ人やアメリカ人にとっては、ダイミョーの前でこの国の住民と同じように埃にまみれて平伏するなどというのはできない相談だった。日本の重要人物に不敵な視線を投げてその敏感なる威信を傷つけた無礼者を罰するため、家来が剣を抜いたのも1度や2度ではない。それゆえ現在の革命は、じっさい、外国人の存在が必然的に引き起こした論争に端を発しているのである」。

ここで革命という言葉が出てきました。「イリュストラシオン」の記者は、大政奉還を、1789年のフランス革命になぞらえて考えているようです。革命の恩恵を受けたブルジョア層を読者層とするこの新聞の記者は、当然、ばかばかしい身分制度を奉じている徳川体制下の日本というものには非常に強い批判を提示しています。

次の引用6「神戸事件首謀者の切腹」(図版⑤)は、神戸事件という、やはり攘夷派の起こした事件の1つに関する記事です。備前の藩士が神戸の居留地で見聞中の外国公使に発砲したというところから、非常に騒ぎが大きくなった事件です。結局その首謀者は切腹を命ぜられることになって、外国の公使がずらりと招かれた会場で切腹をすることになります。図版⑤がその様子なのですけれども、こういう切腹が公開されるようになった背景には、さまざまな外国の意図が絡んでいます。日本に外国の威信を知らしめるであるとか、列強がたがいに自分の威信を確立したいといったような意図が絡んで、このような催し物による演出がなされることになったわけですが、この記事は、静かに強い意思をもって自分の死を受け入れていく「受刑者かつ死刑執行人」である切腹者について、非常に淡々とした描写をしています。

切腹は、ヨーロッパ人にとっては相当ショッキングな処刑というか、自殺の方法ですから、「イリュストラシオン」でもときに冗談まじりで「ハラキリ」に言及した記事がいくつか見られます。ただ、残念ながら、切腹について文化論としてまじめに論じるに至るまでには、やはりあと70~80年は待たなければならないかと思います。つまり、20世紀を待つことになるのです。

引用7は、「ミカドの横須賀製鉄所訪問」です。横須賀の製鉄所といいますのは幕府の時代に建設が決定され、1865年に起工、さまざまな紆余曲折を経て、1872年にやっとできた施設です。そこに、それまでは門外不出の存在であったミカドが視察にやってくるのです。この視察に関しては、引用でも省略させていただきましたが、「ミカドというのは全く外に出ることはない人で、家来たちもミカドを外に出すまい出すまいとしてきたが、このたびやっと出てきた」というような記述もあります。

記事では、この製鉄所でのミカドの1日を詳細に報告した上で、「まもなく日本は、自身を停滞させている束縛から解放され、進歩と富にむかって完全に門戸を開くだろ

う」というようなことをいっています。

引用8「大政奉還＝革命」は、大政奉還を総括したような記事です。1873年ですから、大政奉還そのものよりも後になりますが、先ほど申し上げたように革命という言葉を使っております。これは何といてもフランス革命を実現した国の立場が非常に大きいといえます。革命を起こした日本は今後民主的になるだろう、日本はようやく文明化の途に就いたのは非常に喜ばしいことであり、将来の展望に期待しているというような内容になっております。

鎖国から開国に至る日本を見る「イリュストラシオン」の尺度とは、文明化、キリスト教、そして革命の3点であると言えます。

では、この時期にフランス人が見た日本人の印象について少しみてみたいと思います。実のところ、幕府の体制、あるいは武士の集団に出会ったときの「イリュストラシオン」記者の印象というのはかなり否定的なものが多くなっています。先ほど少し役人の横暴に関する記事をみたりしましたが、概ね、前近代的、ばかばかしい身分差別、役人の横暴、進歩の妨げ、といったことが挙げられています。他方、「イリュストラシオン」記者が語る一般の民衆についての印象は、必ずしもそれと一致してはいません。

例えば引用9「フランス人との共通点」。「あらゆる文明化された国民のうちで、フランス人こそは、好みと性格から言って日本人がもっとも相性がよいと感じる国民なのだ」という確信を得た。知的で活動的、勤勉にして勇敢で活力があり、子供のように陽気で、悪賢くて軽妙、礼儀正しく親切な日本人は、世界の中でもっともフランス人と似たところのある国民のひとつである」というようなことをいっています。実はこれと同様の内容は、ほかのところにもたびたび出てきます。かなり好感をもってみている面もあるのですね。

ここにも中国、あるいは韓国、朝鮮、あるいは琉球、沖縄の方がいらしていたら、申しわけないのですけれども、これら日本のまわりの国々に対する「イリュストラシオン」記者の評は、私がみる範囲では、中国人につきましては、考えていることがよくわからない、なかなかつき合うのが難しい、気難しいというような記述があります。朝鮮に関しては、中国、あるいは日本という国に挟まれて、いつも隷従、従うことに慣れきっているというようなことをいってみたり、琉球については、かつては樂園のような島であったのが、日本や中国に実権を掌握され、全く気力を失ってしまっているという、そんなことを嘆く記事がいろいろとあらわれてまいります。ただし、私はやはり日本を中心に記事を読んでいるので、日本びいきの記事が多く見られるということかもしれません。中国に関する記事もまた、ものすごく多くあるのです。当然、親中国派の記者もいるはずですから、全然違った記述があるであろうということは想像に難くないところです。ただ日本記事に関するかぎり、日本人の評価は決して低くはありません。

少しおもしろいこととして挙げられるのが、引用10（図版a1）の「公衆浴場」つまり日本のふろ屋の記述です。「習俗の点から言えば、日本国民は信じられないほど墮落している……近親相姦といった東洋人のもっとも恥ずべき情熱が、風土病と言ってもよい」ほどの域に達している、というように大変な批判をしております。やはりキリスト教国であるフランスの人にとっては、他人の前で惜しげもなく裸の姿をさらすのはとんでもないことだったようです。こんなものから早く目を背けたいなどという記述もあるぐらいです。ただ、引用11では——この記者はなかなか考えの広い人だなと思うのですけれども——とんでもないと否定しながらも、「みんなが裸で、男も女も混じって入浴しているのにもかかわらず、ここでは混乱（性的混乱）が一切起きない。みんなまじめに体をこすり合うために来ているのだ」と述べて、そのことに非常に驚いております。当時のヨーロッパというのは、人前で裸になるといったら性行為のほか何も意味しないのですね。日本では——今でも私たちが温泉に行きますけれども——裸体をさらすことに対する観念がキリスト教国とはまったく違います。その落差がみえて、なかなかおもしろいところです。

図版もなかなかおもしろいものです。日本人の入浴風景といっているのですけれども、よくこの図版をみると、まるでローマの衣を着たような人が体を洗っているというような、やはり実際にみて書いていない部分もあるわけで、そうすると、大変おもしろい、奇妙な西洋と日本の混交が起きます。

その下にある図版a2は、函館の祭りの風景です。引用12「祭の印象」では、この祭りの進行や行列の人々の装束、たくさん見物人が集まってみな酔いしれている様子などがかなり詳細に描写してあります。その後、祭りに集まっている民衆について、「放縦の極みにあったこの人々全体のなかに、制圧しなければならないような混乱は一つとして起きなかった」としています。みんなが酒に酔っぱらっているのにもかかわらず、何の混乱も起きず、みんなが陽気に祭りを楽しんでいる、彼らはお互いに礼儀正しく、物腰がやわらかである、ヨーロッパで人が集まって酒を飲んだりしたときに、えてして起こるような混乱と無縁である、と、日本の民衆の気質をかなり評価しています。

この祭りの描写はなかなかおもしろいものがありまして、機会があらわれたら、先にご紹介しました『フランスから見た幕末維新』をごらんいただけたらと思います。

引用13「相撲」（図版a3）をごらんください。相撲というのはやはりヨーロッパの人にとっては驚き以外の何物でもなかったようです。力士に関する記者の描写を拾ってみます。「スポーツだと思って来たのに、互いに向き合って、あきれほどじっと身動きせずにいるばかり」（動かないでいるということ自体、とても不思議なものらしいですね）、「あたかも肉が精神を吸い尽くしてしまったかのようだ」、「女性よりも脂肪のついた胸はぶよぶよと垂れて、動きにつれて揺れる」、「赤っぽい肉封筒」、「ぶよぶよした脂肪の固まり」など。これが彼らの生の印象なのですね。

この相撲につきましても、これが70～80年後の20世紀の、例えばポール・クローデルなどという人が書いた『朝日の国の黒い鳥』という評論をみますと、動かないでいることに精神性を見出すところまでフランス人の異文化理解が深化してくるのですね。ただ、19世紀の新聞記事ではこのようになり生の表現になるのです。こういった生の表現というのは、ばかばかしいところはあるのですけれども、読んでいておもしろいところがあります。

以上、本格的な異文化理解に至っているとはいえない生の印象に終始しながらも、フランスの記者が、日本の民衆についてはかなりおもしろさを感じ、また評価をしているということは頭に置いておきたいと思います。

2. ジャポニズムの時代

では、次に、1870年代以降1890年ぐらいまでの時代に入りたいと思います。この時代のテーマはジャポニズムの隆盛です。その大きな契機をつくることになりましたのが1867年の万博です。実はこの万国博覧会もイギリスで始まった催しです。1851年に始まって、フランスのパリで第1回の万博が行われたのは1855年、以来、ほぼ11年おきに行われています。この万博というのは、今ではいろいろな国の文化を紹介する催しとして認知されていますが、もとを辿ればこの催しは、むしろ通商、あるいは産業の育成を目的としたものでした。さまざまな国の産物の品評会という感じです。この博覧会で大衆の興味を引きつけ、開発や通商、販売を促進するという目的が根底にある催し物なのです。ただ、この万博が行われることで、日本だけではなく、さまざまな異国の産物や文化が紹介され、大衆の興味をそそり、そこから異文化理解というものの第一歩が踏み出されることになったのです。

引用14「1867年の万博」(図版⑦)をごらんください。この万博には薩摩藩からも参加していますが、これは江戸幕府が展示した大君館の内部です。もともと印刷が余りよくないということもあり、おわかりになりにくい点もあるかと思いますが。記事には以下のような記述があります。「古くから陶器や翡翠を作りつづけてきた土地(=中国)が死に絶えようとしているとき、すでに長い歴史を持つ奇抜で興味深い新たな王国が現れ、はじめて登場したときから、芸術家や蒐集家たちを魅了してしまっただけである。色彩、優雅さ、多様性、洗練された形、信じられないほど精緻な細工——彼らにはすでにすべてがある。「すべてがどれほどの値段で熱心に買われ、飛ぶように売られているのかを知る必要がある」。

また、この引用からかなり飛んで、下線部「端正とは言わないまでも、少なくとも計り知れないほど独創的で奇抜な展示品となって」いるというように、細工の精緻さ、繊細な細工というのは非常に評価をされているところです。また、それは「ほとんど夢をみているような気持ちになるほどだ」といったような記述もみられます。

この1867年の万博において、特に江戸幕府が展示した大君館の評判は大変なものだ

ったようです。日本の美術、あるいは工芸品がフランスの人たちに強いインパクトをもたらしました。先ほど見た相撲もちろん、興味深い異文化として紹介していないわけではありませんが、あれは「ぶよぶよの肉体」、「肉封筒」などといったようにどちらかというときわ物を紹介するといったようなニュアンスがありました。この万博の出品物の報告においてはじめて、本物の異文化としての評価の一端が出てきたといえると思います。

引用15「フィルマン・ジラルール画『日本女性の化粧』」（図版⑧）をごらんください。これは、日本にインスピレーションを受けて描かれた絵画を挿絵で再現したものです。記事の中でも、日本文化に対する評価が見られます。この時代には、万博などを通じて日本の文化が紹介されたことから、一気に日本文化への興味が高まり、日本を作品の題材にする画家が多く出てきます。皆さんよくご存じのルノアールも、日本を題材とした絵を描いています。ここでは「イリュストラシオン」で数多く紹介された絵画の挿絵の中から一例をご紹介しますにすぎません。ほんとうに西洋の画家が日本趣味の絵を一気にかくようになるのですね。図版からそれを少し感じていただけたらと思います。肉体の描き方は、太り肉の女が出てきて、まるでルノアールのような感じです。偽者の日本といえばそれまでですが、むしろここには、画家のインスピレーションの中に生じた日本と西洋の融合を見るべきでしょう。

ジャポニズムが現われたのは絵画ばかりではありません。日本を題材にした連載小説も書かれていきます。引用16の『ヒョットコ』がその例です。残念ながら挿絵なしなのですが、なかなかおもしろい内容です。題名のヒョットコというのは主人公の名前です。女の人です。ヒョットコという美しい日本娘と、開国でやってきたフランス軍の将校ラヴィゾンの恋の物語ですが、彼らの恋にはさまざまな苦難が付きまといまいます。オガサワラという大名がヒョットコに横恋慕をして、何とかヒョットコを奪おうとする、命からがら逃げるが、大君（将軍）がヒョットコに手を伸ばしてくる。ラヴィゾンは万難を排してこれを救い、天皇に会見して開国・開化を進言し、そしてめでたくヒョットコと結ばれるという筋です。ここでもやはり大君と天皇は大変おもしろい設定になっています。大君というのは古い体制、打ち破るべき体制の象徴、天皇は未来のあるべき体制の作り手、そして天皇に未来のあるべき姿を示唆するのはフランス人将校ラヴィゾンというわけです。

外国を題材にした連載小説というのは、「イリュストラシオン」という雑誌の目玉記事の1つです。日本ばかりでなく、あらゆる外国のさまざまな風物を盛り込んだ形で連載小説が編まれています。この「ヒョットコ」に関しましても、ヒョットコという少女とラヴィゾンの恋愛を軸にしながら、日本の文化や社会、あるいは生活様式が紹介されていきます。

時間の関係で全部を読むことはとてもできませんが、興味深いところを拾ってみましょう。例えば、「町人というのはとても教養があつて頭がいいけれども、身分は低

い」、「彼らは自分の富とか知性を隠して身をひそめていなければいけないが、本当は勢いのあるのは町人である」といったような記述が見られます。大名あるいは大君（将軍）に対する批判は連載のなかで一貫しています。日本の女性の着物の美しさを紹介するようなパッセージもあります。一方、日本の女性に関しては、「すべてにおいて意思がなく、子供のときには両親に従い、また結婚したら夫に従う」、「その女性の弱さというのが日本の門戸開放や近代化の大きい障壁になっている」といったような記述もみられます。ラヴィソンに出会ったことでヒョットコと家族の者が自由、人権感覚に目覚めていく過程もなかなかおもしろく読めます。このように、筋自体はたわいもないものなのですが、この連載には、フィクションを通して異国の文化をときに批判も交えて紹介し、読者を楽しませ、かつ教化するという方向性がつねに存在しています。

また、当日追加資料（図版21）は、1889年に開館されたギメ美術館のもので、パリのシャンゼリゼ、エッフェル塔などにもかなり近い、イエナ橋というところに現在もある美術館です。エミール・ギメという人は実際にこの時代に日本を訪れている人の1人です。ギメは、もともとは必ずしも東洋学の専門ではなかったのですが、東洋の宗教に興味を覚えて、日本のみならずインド、中国などさまざまな東洋の国を訪れて、仏像やさまざまな美術品などを持ち帰り、それがもとになってギメ美術館ができました。ここでお目にかけている図版では、インドも東南アジアも中国も日本も、いろいろなものがごちゃごちゃになって1つの画面を構成しています。

明治維新以後は、神道を国家宗教として位置づけようという動きが起きてきますから、それには仏教が邪魔なわけですね。それがラジカルな形で廃仏毀釈運動へと発展してゆきます。「イリュストラシオン」によれば、仏教寺院は非常に危機感を覚え、それゆえ外国から来たギメという東洋学者に、普通なら期待のできないような好意を示してくれたということです。つまり、外国人によって日本の寺、仏教の良さをわかってもらえば、それが力になるのではといったような意図から、かなり親切にいろいろなことを教えてくれたらしいのですね。「宗教改革」（1877年2月10日号、当日追加資料 図版⑳）は、ギメがお寺を訪れて話を聞いたときのものです。一方、神道側も、仏教に負けじとギメを招待して、随分いろいろな情報をくれたらしいのです。それにより得られたギメの成果を集めたのがギメ美術館なのです。

詳しく申し上げる時間はありませんが、このほか、さまざまな美術作品、あるいはオペラや演劇に日本が取り上げられることも非常に多くなりました。例えば引用17「日本趣味のオペラ『コジキ』」（図版㉑）をごらんください。これもたくさんある日本趣味の演劇やオペラの一例にすぎませんが、筋をみると、恋人がいて、その恋路を邪魔する者が出てきて、万難を排して恋を成就するといったような、あえて日本を持ち出すことの意義がどこにあるのかわからないような筋です。また、挿絵をごらんになると、日本趣味なのか、一体どこの国なのか、よくわからないといったような面も

あることは事実です。そこに、あえて、習い覚えたばかりの「コジキ」などという名前を入れてみるわけです。先ほどご紹介した『ヒョットコ』も同様の面があります。我々からしたら、小説のヒロインに「ヒョットコ」という名をつけるなど笑止千万なのですが、フランス人の新聞記者にはまだそれがわかっていないのですね。「コジキ」、「ヒョットコ」などという言葉が覚えますと、それが新鮮で使ってみたいわけです。

そのほか、日本美術の紹介など、文化についてはやはり挿絵に一瞥を投げていただくと、よりわかりやすいと思います。例えば引用18（図版⑩）ルイ・ゴンス著『日本美術』。これは日本美術を体系的に紹介した大著です。図版⑫は1889年の万博の日本館の外観です。トロカデロというところに別館がしつらえられまして（引用19 図版⑪）、そこでは盆栽が紹介されました。「イリュストラシオン」では盆栽について挿絵つきでかなりの紙面を割いています。

そのほか、時間の関係もありますので省きましたけれども、「イリュストラシオン」では、いわゆる王道のような作品ばかりではなく、例えば日本の切り絵やパズル、箸の使い方、日本から輸入した着物の流行といったように、日常の生活に密着した情報が随時いろいろな形で出されています。「イリュストラシオン」という雑誌は、ブルジョア階層に日常の楽しみを与えるという性格も強く、さまざまな日常的な品物、楽しみといったものを扱った記事が非常に多いということも申し上げておきます。そんなものを通してジャポニスム、日本趣味というものが大衆の中に浸透していったわけです。

3. 近代国家日本への批判

では、大変駆け足ですが、最後の項目である近代国家日本への評価と批判というところに移ってまいりたいと思います。この近代国家日本への評価と批判について考える際にとくに材料としたいのが、1894年から95年にかけての日清戦争周辺の記事です。日本はそれまで欧米をまねる形で近代国家を急いで建設してきて、19世紀末には一定の成果を上げたといえると思います。日清戦争は、それを海外に示すことになったたぐいまれな機会となりました。一方、少し否定的な面をみるとすれば、以来、第一次・第二次世界大戦へとつながる戦争へと日本が進んでいく契機にもなった事件であろうかと思えます。

まず、図版⑬から⑯をごらんください。⑬は巡洋艦「浪速号」です。これはほんの一例です。ほかにもいろいろな船が出てきます。船の名前を一々挙げて解説していてもしますし、村田銃などという、西洋の銃をまねた銃の絵がそのまま出てきたり、あるいは肖像画——ここでは山県有朋と伊藤博文ですが——も頻繁に多数掲載されます。また、旅順港全景といったようなものが出てきたり、あるいは旅順でも、もっと細かい、砲台や大砲などというものの挿絵が掲載されることもあります。

図版⑰は、オッペンハイマー兄弟が提供した図版を転載したもので、日本の軍隊の

変遷を絵にしています。

この日清戦争について、フランスの記者たちがどのような評価をしているか。これも時間の関係でやはりはしょらざるを得ませんが、少し文頭のところだけでも読んでみたいと思います。引用20「脅威か単なる模倣か：フランス軍事顧問団と日本陸軍」をごらんください。「およそ30年前から懸命にヨーロッパの模倣をしている極東の特異な小国の民が、究極の体験によってみずからの成せる業を確固たるものにしようとしている。つまりこの国は、最新のきわめて科学的な戦争の手続きを通じて、近隣の何十万もの人々を根絶やしにしながらか、『文明』大国の肩書きを恒久的にわがものにしようとしているのである」。非常に辛辣な書き出しです。

以下、スペースの関係もありまして、少し削らせていただいたのですが、フランスの軍事顧問団による日本の軍隊の再編ということがかなり事細かにたどられています。記事に即したかたちでまとめてみると、まず、このフランスの軍事顧問団を招いたのは、最初の方で申し上げたとおり江戸幕府です。1866年から始まるのですが、第一次顧問団の就任期間は1866年から14ヶ月です。これは政変の関係もあって、滞在期間が短く、組織の基礎をつくったということぐらいいまでだったようです。第二次顧問団、これは明治政府になってから、1871年から8年間にわたり活動しました。この時期のポイントは、「イリュストラシオン」の記事によれば、「かつての武士精神から近代の軍隊精神へと日本の精神を変貌させ」たことで「近代的な軍隊の構成、組織も含めて、本当の意味の基礎をつくった」のがこの第二次の時期であるとされています。第三次はその仕上げの時期で、1884年から89年にわたります。

ところで、「イリュストラシオン」の記者は、こうして「近代化」された日本軍について次のようなことを述べています。「日本の軍隊というのは、なるほど非常にすばらしいものであるけれども、これは形だけにすぎない。何しろ戦争したことがないから（この記事は日清戦争前夜にかかれています）。戦争をしたことがないから、化けの皮もはがれるだろう。」さらには、「日本人は結局模倣をしているにすぎない。彼ら模倣を創造だと考えているようだ。剽窃家でありながら発明家と名乗っている」というような辛辣なこともいっています。

このような辛辣な評価をする1つの原因としまして以下の事情も考慮に入れるべきでしょう。すなわち、フランスの軍事顧問団というのは、いわば日本の軍隊の基礎を築いたわけですが、しかしながら、日本の方が途中から方向転換をしまして、ドイツに顧問を依頼するようになるのです。というのは、どうもフランスのような西洋の先進国よりも、むしろビスマルクという宰相に率いられて、後進国でありながらフランスを脅かす存在になり得たドイツのまねをした方がいいのではないかというようなこともあったようです。それで、指導者をドイツに変えていくのです。「イリュストラシオン」の記事にも「ドイツ化されてからというもの、それは(=日本軍)まるで堅苦しく規則的に歩く小さな鉛の兵隊の集団のように…」などというように、かなり不満が

あらわれています。

とはいえ、実際に戦争が起こってみると、日本軍の目覚ましい活躍は、ヨーロッパの新聞記者にも無視すべからざるものと映ったようです。引用21「日清戦争における日本軍の活躍」をごらんください。日本軍の活躍を報じる記事はたくさんありますが、その一例です。「日本軍は先の11月21日、旅順の輝かしい戦勝により、すでに中国から勝ち取っていた一連の勝利を不動のものとした」等々。中国というものが弱体化しているのに乗じて、近代化された日本が進んでいく様子を詳細に伝える記事が多数あります。

一番下の下線部ですが、「ある意味で戦闘の成功を決定づけると言える旅順港の占領は、近代的な強国としての日本の力量を他に知らしめるものだった」といったような高い評価が出てきます。

ちょっと引用文献が飛びますが、例えば引用23「義和団の乱と北京の連合軍」をごらんください。これは1900年中国で起こった義和団の乱の制圧を報じたものですが、この義和団の乱におきまして、日本軍はヨーロッパの連合軍につく形になるのですね。義和団という中国の反乱軍をヨーロッパの軍隊がいかに制圧するかということは大変な懸案となっていて、義和団はかなり激しい抵抗をしたらしいです。ヨーロッパの居留民が孤立してしまったりしまして、その対策を考えあぐねていた。記事によれば、「その救出が問題となったが、まともに進んだのでは数ヵ月かかるだろうといわれていたようなところに、非常に優秀な指揮官に率いられた日本軍が登場して、ヨーロッパ軍が進まないなら、自分だけでも突破をするといって突破をし、中国人をやっつけて、そしてヨーロッパ人を解放した」、つまり、「我々（ヨーロッパ軍）の救世主はミカドの軍隊である」といったような、日本軍の優秀さをたたえる文も出てまいります。つけ加えるなら、ここでは、挿絵ではなく写真が掲載されています。1890年ぐらいから少しずつ、挿絵にかわって写真が出てくるのですけれども、1900年まではまだまだ、数少ない写真の1つです。図版⑰です。これは義和団の乱で北京を解放するのに貢献した日本の将校たちです。

このように日本をたたえる一方で、引用22「日本人の表と裏——根強い反欧主義」のような記事も書かれます。これは時代からいいますと、1895年、日清戦争の少し後になります。私などが読んでいまでも、日本人としては余り気持ちのよくない、非常に意地悪く辛辣な内容になっています。かいつまんだ形でしか申し上げられませんが、「日本というのは非常に急速に近代化をして、ヨーロッパ精神を自分のものにしたようにみえるけれども、結局みせかけの日本と隠された日本という2つの面がある」。外国人旅行者にとっては、日本を訪れるというのは大変興味深いことですね。例えば日本のお寺であるとか、着物をみたり。だが、それは実は「陳列用の商品見本のように飾りたてられた日本」であって、また、「それを広める方法も気前良く整えられている。そのおかげで国庫はかなり潤っている。土地の住民たちは善意の仲介をし

ながらいそいそとそれを見せようとする」など。

段落が変わると、「しかしながら、見えるのは御殿が寄り集まったようなホテルなどばかり。イギリス人やアメリカ人といった観光客が見ているのは、日本人によって経営されている土産物屋ばかりだ。旅行者が日本文化と思って見ているもの、たとえば、寺などは、過去のものであり、全く滅んでしまったものなのだ」といったような非常に辛辣な見方をしています。

その下の段落では、「すだれをかけた窓の奥がみえないと同じように、日本人の本当の姿はうかがい知れない」、「日本人の細い目の裂け目からは、心の中をうかがうことができないのと同じように、日本人の本当の姿などというのはみえないのである」ということをいっています。目というのはやはり西洋人にとっては心の窓であるらしいですね。ですから、目が細い日本人というのは、ある意味ではとらえどころのない、心を見せない、油断のならないものともみえるし、また、私の友人のひとりが言ったところによれば、ある意味では計り知れない魅力と見えることもあるようです。とはいえ、この記事の中では、日本人の容姿も一貫して非常に否定的に報道されています。

そして、記者（ビルタール・ラゲリー）は、「すだれの奥にこそ本当の日本人、つまり、極東における白人の通商や影響を廃絶するための準備をしている日本人が隠されている」としています。つまり、欧化政策によって、いろいろとヨーロッパのものを取り入れたようにみえるけれども、心の中では西洋人を非常に嫌っていて、それを廃絶するための準備を着々としている日本人が隠れているのだということを行っています。

さらに、この辛辣な著者は、以前の記事で報道されていた日本の「革命」（大政奉還、明治維新）についての考察も行ない、日本で革命が起こったと言われるが、実は日本の社会は何も変わっていないのだということを強調しています。彼の記事の内容をまとめると次のようになります。「勅令が出て、昔の身分制度が全部反古になってしまったはずであるのに、既得権益は依然として残っている。また、その既得権をもっている者というのは、相当の経済的利得を得ている。上流階級は無気力、下流階級も身分制度などを打ち破る力は残っていない」。この著者がいちばん我慢がならないのはどうも中産階級、日本のブルジョアたちらしいです。「ヨーロッパ風の服装をするのは、宮廷で職務を遂行する上・中級官吏か、または、開港された港にいる限られた商人か、あるいは公共の場に出るときに限られる」。「そんな連中が皆家に帰るとすぐに着物に着替える。そして、何かあると、着物を着て靴をはいたり、着物に毛皮の帽子をかぶったりといった非常にちぐはぐな格好をして出てくる。そんな連中に限って、なれ親しんだ服装になると外国の悪口をいうのだ。こういった一見新しく生まれ変わったかにみえる日本に根強く残っている排外主義というものは、日本から決して消えることはないのであって、日本は究極的には東洋のプロシアになるのだ」というようなことを言っています。この引用の最後の方になりますけれども、「東洋のプロシアになるこ

とを夢みている」とはフランスにとって脅威であるドイツと日本を重ねる見方が、当時すでにあらわれていたことを示しています。記者はそれを、「黄禍」と呼び、「このまま日本を放置しておく、やがて禍がもたらされることになるであろう」といったような、非常に否定的かつ意地の悪い批判でもって、この記事締めくくっています。

以上、大変駆け足でありますけれども、フランス人のみた日本というのを3つの期間に分けてみてまいりました。1、2分で振り返ると、最初の時期の記者たちには、鎖国という、フランス人からみると非常に不思議で理不尽な体制にある日本を、文明の力によって開国・文明化へと導くということをフランスの使命と考える姿勢がみとめられます。また彼らは、彼らの導きによく答えた日本というのをかなり評価していたようです。そして、中期、つまりジャポニズムの時代になりますと、単に後進国を導いてやるということだけではなく、異文化としての日本の姿が——まだ不十分な形ではあれ——見えてきます。特に美術品などを通して、単に物珍しいということではなくて、ヨーロッパとは違う価値をもった文化があるのだということが理解されるようになってきます。そして、日清戦争、あるいは義和団の乱（ゆくゆくは日露戦争へと発展していくのでしょうけれども）の時代になると、かつては、いわば自分たちの導きでもってうまいぐあいに開化をしてきた日本というのを好意的にみていたのが、そうとばかりもいってられない時代になってきた、というような感覚になってくるのです。

じつは、開化をさせるというのも、ヨーロッパの立場（利益）から、極東の安定、あるいは通商上の利益をもくろんで、開化・開国をさせたわけですね。最初のうちは、日本は、フランスが思ったとおり、あるいはそれ以上に発展してくれるような形になってきたと思われたわけです。ところが、19世紀末期の日清戦争の時代になると、いわば東方の小国である日本が、フランス人たちの意図を超える形で、分不相応な発展をし、ひいては彼らを脅かすことにもなりかねない情勢になってきた、というのです。もちろん、全部が全部 100%そういう論調であるということではありません。もちろんこの時代でも日本を評価する記事もたくさんあります。しかしながら、フランスの記者は、すでにこの時期に、帝国主義をわがものとし、極端な欧化主義を進めて、周りの中国、あるいは朝鮮といったような国々を蹂躪しつつ、やがて第二次世界大戦へと進む兆しをみせ始めた日本の姿を垣間見て、危惧を覚えていたのです。非常に辛口の批判には、彼らの苛立ちやある種の不安があらわれているとも考えられます。

この「イリュストラシオン」を通してみる日本というのは、最初にも申し上げたとおり、とても網羅的といえるものではございません。また、大衆に訴える新聞という性格もありまして、文化、あるいは帝国主義への批判にしても、日本の帝国主義を批判するならば、ではフランスの帝国主義はどうかといった疑問が、私たち日本人からすれば、当然わき上がってきます。そういったことに対する自己批判をするほど

深い記事は、すくなくとも当時は、残念ながらあまりなかったようです。そういった底の浅さはあるものの、文化を大衆の視点でみるということに関して、「イリュストラシオン」という新聞の日本関係記事は、私にとりましてはかなり興味深い材料を提供してくれたように思います。

4. 質疑応答

○司会者 どうもありがとうございました。

大変な作業だなと伺っていました。ちょっと基本的なところから少し教えていただきたいのですが、まずこの「イリュストラシオン」というのは週刊なのでしょうか、月刊なのでしょうか。それから、どのぐらいの間隔で出ているのですか。

○朝比奈 週刊ですね。

○司会者 1843年から、きょうは1900年までの50数年間ですけれども、先生が研究を進められるときは、50年分の新聞というのはどういう状態になっているのでしょうか。

○朝比奈 これは有名な新聞ですので、例えばフランスの国立図書館その他、有名な図書館ではかなり所蔵している可能性も多いのです。日本でも立教大学にほぼ全巻がそろっております。私は原典に当たる場合は、やはりそこを随分使わせていただきました。また、横浜開港資料館という施設があって、そこでも全巻そろっていて、またそれを編んだ本もできております。翻訳をする際には随分参考にさせていただきました。

○司会者 そうすると、その研究者という一群の人たちがいらっしゃるという感じになるわけですね。

○朝比奈 そうですね。ただ、それにどれほど集中した研究がなされているかは疑問です。なんといっても記事が、それこそ100年分にしますと5万ページぐらいと膨大なものになること、また記事の内容が、きょうお読みしたとおりがばかしいものも多いということがあって、それらを体系的に読み解くというのは、なかなか労多くして益少ない作業であろうということがあるのですね。

○司会者 例えば日経新聞を50年分読んでも、やはり書いた人によっても時代によっても違うでしょうし。

○朝比奈 そうですね。

○司会者 先生以外の「イリュストラシオン」を読んでいらっしゃる研究者の方というのは、どういう視点で読まれる場合が多いのでしょうか。

○朝比奈 横浜開港資料館では、創刊から日露戦争までの時期の日本記事を収集、コピーした資料が編纂されています。大きい3巻本になっています。これは翻訳ではなく、記事を集めた資料集ですが、もちろん収集するときに記事の内容をみきわめるわけですから、学芸員の方々は記事の内容を把握し、アウトラインをメモしてくださ

ったりしています。でも、今のところはそれぐらいでしょうか。

○司会者　　そうすると、まだみつかっていない視点というか、いろいろな利用方法があり得る資料ということになるわけですね。

○朝比奈　　そうですね。ちょっと申し遅れましたが、この「イリュストラシオン」という新聞を、フランスにおいてフランスの大衆文化をどのように作り上げてきたかという視点から研究した仕事があります。これは仏文畑の、小倉孝誠さん（慶應大学教授）によるものです。3巻本の大著です。フランスの「イリュストラシオン」といえば参照すべききわめて興味深い仕事です。小倉氏はそこで、総合新聞としての「イリュストラシオン」に焦点をあて、当時のフランスを映し出すさまざまな記事のおもしろさを読み解いています。

○司会者　　「イリュストラシオン」は1部幾らで売られていたものなのですか。

○朝比奈　　1部が75サンチームです。年間講読料が30フラン（地方は送料も込みで32フラン）です。

○司会者　　それはどういう金額になるものなのですかね。

○朝比奈　　小倉さんの説明を借用させていただけば、75サンチームというのは2日分のパンに当たります。

○司会者　　それは6回分ということですか。

○朝比奈　　そうですね。当時、挿絵入りの新聞は幾つか出たのですが、その中でも高い方だったらしいです。もっともっと大衆的な新聞もたくさんあって、より売れたものもあったらしいです。

○司会者　　1部何ページぐらいのものなのですか。

○朝比奈　　1部が大体10数ページから20ページほどですね。そして、その中に挿絵は、かなり大きい挿絵も含めて10個ぐらいは入っています。

○司会者　　この「イリュストラシオン」の図版入り新聞というものが、その後写真入り新聞に引き継がれていくわけだと思うのですけれども、その後継した新聞というものでは何を引き継いでいると考えればよろしいのでしょうか。「イリュストラシオン」から次の写真の時代に移ったときの代表的なフランスの写真入りの新聞は何になっていくのでしょうか。

○朝比奈　　どのようにお答えすると一番ご質問の趣旨に合うのかなのですけれども、挿絵ということについて一言申し上げます。当時もし写真が普及していたなら、多分写真を撮って載せれば一番シンプルだったはずですが、ところが、現実には少しちがいました。写真機はあったのですけれども、ダグレオタイプといって写真を撮るだけでものすごく時間がかかったのです。むしろ、挿絵画家が描く方が早くできたらしいですね。それで写真でなく挿絵になっていたということがあります。この「イリュストラシオン」も1890年ぐらいからどんどん写真が出てきます。つまり、初期からこの新聞の果たした役割というのは、ある意味で、写真入りの、今でいうグラビア雑誌であ

るとか、写真入りの週刊誌にあたるものであったと思われます。しかも、この新聞は創刊当時から値段が高かったということもあり、また、読者層としては、ブルジョアの中でもインテリ層を対象としていたようで、良識あるブルジョアが読むかなり良識のグラビア付総合雑誌というような感じだったようですね。

お答えになっているかどうかよくわからないのですが。

○司会者 いやいや、どうもありがとうございます。現代の日本でも『朝日グラフ』とか、ああいうものがありましたけれども、それがいわゆる写真週刊誌に退化していくわけですよ。だんだんイエロージャーナリズムの方に向かっていった部分があって、高い水準での報道写真を撮ったロバート・キャパみたいな、そういう水準が維持されなかったような感じがするのですね。

○朝比奈 1900年以降のものについては、私自身がまだ研究を進めていないということもありますが、ただ、「イリュストラシオン」の位置は廃刊までおそらくあまりは変わっていないのだろーと思えます。創刊から廃刊までを通じて、有名かつ良識ある雑誌として、おそらく余り質は落ちてなかったのではと思います。

○司会者 ちょうど時期的にはボアソナード博士が法政大学にいらっしやったところというのは、ジャポニズムの波が元気だったときということですよ。ですから、日本にいらっしやる前にフランスでそういうものに触れられて、日本に来られたかもしれないという、そういう時期ですね。

○朝比奈 そうですね。残念ながら、「イリュストラシオン」日本関係記事には、私がみた範囲内で、いろいろ落ちもあるかもしれないのですが、ボアソナード博士に関する記述がないのです。

○司会者 まだ若干時間がございますが、どなたかご質問などございますでしょうか。

○質問A きょうの解説を伺いまして、特にきょうはフランス人の評価というか、批評といたしますか、当時、向こうは進んでいたのでしょうかけれども、なかなか鋭い観察をしているなど。こういうことは日本人が外国に対してこのような観察ができるのか。欧米人の特色なのかどうなのか。

○朝比奈 どうでしょう。私は、日本人が外国や外国人について書いたものに精通しているわけではないので、本当のお答えにはならないかと思えますけれども、ただし、この「イリュストラシオン」には、例えば幕府の外国奉行になっているような人たちについて、「オランダの出島などを通じて外国の文化におどろくほど精通している」という記述がございます。外国を批判的かつ、ある種開かれた目でみていたというのは、これは日本についても当然言えることではないかと思えます。ただし、やはり構造的な問題として、経済、通商の基盤であるとか、近代国家を支えるものとしての軍隊組織などといったものが19世紀以降は不可欠になってきますが、そこが、すくなくとも当時はどうしても西洋にはかなわないという事情があったせいで、日本は、

西洋をまねしなければならないという非常に苦しい、いわば構造的なハンディを負っていたわけです。それゆえ、フランスが日本にしたような、ある意味で上から下におろすような批判はできていないのではと思います。

ただ、私はもっと自分が日本史に精通していれば、幕府の記録などをみれば、きっとものすごくおもしろい記述が出てくるのではと思います。ただ、私が把握してないというだけでございます。

○司会者 日本人は確かに卑下するのが得意で、なかなか外国の文化を上から裁断するように描くという人は余り多くないですよ。

○朝比奈 明治になってからも、例えば高村光太郎、あるいは島崎藤村などがフランスに行きますね。高村光太郎などというのは物すごくねじれているのです。やはり日本の理想とか、日本の国を背負って立つという義務感を持って、ものすごいプライドをもってフランスに旅立つのです。明治時代後半のことです。ところが、フランスではなかなか思うようにいかない。フランスに憧れるが、やはり自分のもっている日本文化も大切なのだというような、いろいろな思いが交錯して、ねじれていくのです。同様の記述は、明治後半以降欧米文化に接した人々には多く見られます。やはり当時は、最初から対等な立場の思考ができるというわけには、構造的にできなかったかもしれません。

○司会者 2004年に上海の日本領事館に中国の人たちが石を投げていましたけれども、仮にああいう暴動がもっと手のつけられない状態になって、日本人が人質にとられるような状態になったときに、国際義勇軍か何かわかりませんが、みんなで救いに行きましょうということになったときに、非常に原始的な意味で、歴史的に同じようなことが起こり得る可能性はなくはないわけですね。ですから、国際化が起こると、必ずその反作用というか、リアクションというのがあるのですけれども、義和団の乱の話を思い出す日本人というのは、思い出すというか、つまり、2004年の上海領事館のあのシーンをみたときに、ああ、義和団の乱のときと同じだとかという発想になる人はなかなか少ないですね。100年もたつと、そのころ生きていた人はいなくなってしまうので。

○朝比奈 おっしゃるとおりかもしれませんね。

○司会者 ええ。そこら辺はきょう大変興味深く伺わせていただきました。

○朝比奈 本当に私の専門外のこの発表をご清聴くださりまして、どうもありがとうございました。

○司会者 では、朝比奈先生、どうもありがとうございました。

(満場拍手)

日 時 : 2006 年 6 月 30 日 (金) 19:00~20:30

会 場 : 法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー25F
イノベーション・マネジメント研究センター セミナー室

司 会 : 洞口治夫 (法政大学大学院
イノベーション・マネジメント研究科教授)

フランスの挿絵入り新聞

『イリュストラシオン』から見た日仏近代

朝比奈美知子（東洋大学）

はじめに

『イリュストラシオン』(1843-1944) とその時代

『イリュストラシオン』に現われた日本

- I. 日仏交流の黎明期 : 鎖国から開国・開化へ
- II. 異文化に対する興味 : ジャポニズムの隆盛
- III. 近代国家日本への評価と批判

まとめ

フランスの挿絵入り新聞『イリュストラシオン』から見た日仏近代

朝比奈美知子（東洋大学）

*本発表の内容は、以下の著作の内容に基づくものである。

朝比奈美知子編訳、増子博調解説『フランスから見た幕末維新』、東信堂、2004

同書の翻訳にあたっては、横浜開港資料館篇『「イリュストラシオン」日本関係記事集』全3巻（昭和61年～平成2年）を参考にし、図版の提供を受けた。

*引用に付したタイトルは、内容把握の便宜のため朝比奈がつけたものである。

0. 『イリュストラシオン』(1843-1944) とその時代

社会背景

- ・資本主義社会の発達 →多数の新聞・雑誌の創刊、発行部数の増加と読者層の拡大 大衆化社会の到来
- ・異国、異文化への興味（植民地経営・帝国主義）

『イリュストラシオン』

- ・総合新聞 *journal universel* 政治、外交、軍事などに加え、文化記事、外国の情報の充実
- ・豊富な挿絵
- ・読者層 : リベラルなブルジョア層
- ・扱われる日本記事：網羅的ではなく、フランスにとって興味のある事柄に限られる。

『イリュストラシオン』に現われた日本

I. 日仏交流の黎明期 : 鎖国から開国・開化へ

1. ヴィルジニー号の箱館訪問 (1856年1月19日号) 図版①

箱館において、われわれの艦船の病人、あるいはむしろシビール号の傷病兵たちは、わたし送った略画と同様だがより小さな寺院で手当てを受けた。乗組員は自由に陸に上がり、将校は個人宅でであれ、市場であれ、仏教寺院や国のカミの神社であれ、どこにでも行くことができた。今なお効力を持つタイコーサマの命令が、ヨーロッパの侵略の流れに抵抗して300年にもわたり守ってきた日本というこの国において、これは驚異的なことではないだろうか？今日ではその古びた「鎖国」障壁はずいぶん揺るがされている。しかしそれらはいつ廃棄されるのか、そしてそのときフランスの役割はどのようなものになるのだろうか？それは考えるまでもないことだ。わたしにわかっている役割はただひとつ、あらゆるもののなかでもっとも栄光に満ちた役割である。すなわちフランスは、ロシアのように征服するのではなく、アメリカ合衆国のように商売をするのではなく、イギリスのように植民もしない。そうではなくフランスは、聖フランシスコ・ザヴィエルの偉業を引き継ぎ、血の海の中にあれほど気高く失われたカトリック[注2]の栄光をふたたび取り戻す宣教師団の祖国となることで満足すべきなのだ。

2. 開国の意味：文明化 (1856年11月1日号)

ひとつの政府の支配力がいかなるものであれ、その権威がいかに絶対的なものであれ、その権威と支配力は、正義と真実という打ち負かすことのできない理念に抗おうとするときには、乗り越えがたい障害に出会う。人間社会の進歩は、神の摂理に基づく法則ではないだろうか。その速度を遅くすることは

できても、それを完全に止めてしまうことができるだろうか？堤防をできるかぎり高くしたとしても、大河の水が積もり積もれば一日のうちにそれを越えてしまうだろう。そして長い時間を費やした仕事も、勝ち誇る波にさらわれ、数瞬のうちに崩れ去ってしまうだろう。

*1858年10月9日 日仏修好通商条約 調印

3. 遣欧使節団(竹内使節団) 日本名の発音に苦勞 (1862年4月19号) 図版③

日本皇帝からフランスに派遣された輝かしくご高名なるご一行へ

人の名を間違っ書くというのはまったく礼儀にもとることでもあります。なかでも著名な人々、とりわけ偉大なる専制君主の使節団員のお歴々の名前の方はそうです。わたくしは先の「パリ通信」であなたがたのお名前について誤りを犯してしまいました。謹んで寛大なるお許しを請う次第であります。お許しをいただければ心が慰みません。(…)タケノウチ＝シモヅケ＝ノ＝カミ、マツダイラ＝イヴラニモ＝カミ、キオニョク＝ノ＝カミという方々をわけのわからないグロテスクで野蛮な名前で紹介したことを、どうか読者もお許しくださるよう。今回は訂正の必要はないと確信しております。(…)ヒタコ・カイサブロ [=日高圭三郎]、フウカンチ・ゲンジロ [=福地源一郎]、タチ・コサク [=立広作] というのは美しい名前です。それからマズジナ・ラックタロ [=水品楽太郎]、オッカザキ・タンザイモン [=岡崎藤左衛門]、それにタコハンチュ・ヒッコシャツロ [=高松彦三郎] もきわめて響きのよい名前です。わがフランスで外国語の発音にこれほど難儀するとは、なんと遺憾なことでありましょう！

*竹内使節団：日本側：江戸、大坂、兵庫、新潟の開講延期の交渉 フランス側：礼、開化への教化

4. 徳川体制下の日本：厳格な身分制度、武士・役人の傲慢さ (1862年8月16日号)

名誉の問題はダイミョーとヤクニンの間では非常に厳格である。あらゆる侮辱はその場で、侮辱をした者の死によって濯がれねばならない。さもなければ、侮辱を受けた者は、ただちに自害することで自分自身の臆病をみずから罰しなければならぬ。そうでない場合、皇帝が彼に自分自身を罰することを命じる。タイクンのものである小さな刀が鞘から抜かれ、死刑囚であると同時に死刑執行人であるその持ち主に、その刃が向けられねばならぬのだ。この命令が実行されない場合、その武士の臆病さは取り返しのつかないものと見なされ、追放、つまり先ほど紹介した刑罰に処せられるのである。彼の財産は没収され、妻と娘は売春宿に落とされる。

日本の公務員のほとんど軍隊的な傲慢さは、ヨーロッパとの通商に大きな困難を引き起こしている。じっさい、税関はそうしたヤクニンたちによって支配されている。彼らは商取引に関しての全権を握っており、すでに決まった取引をぶち壊してしまうことさえできる。それに加えて外国人は、民衆には好かれているが、日本の支配階級からは、ブルジョワジー [金持ちの町人] とプロレタリアート [労働者階級] の共感を得ているというまさにその理由により毛嫌いされている。これで、ヨーロッパの領事たちが全権使節の調印が済んだ条約の条項を実行させるにあたって味わっている苦勞の説明がつく。

5. 薩摩藩邸焼き討ち (1868年3月21日号) 図版④

われわれのキリスト教暦の10世紀から、神の代理人であると考えられたミカドが、その尊い血筋

を利用して王朝を築き、その支配は今日でも続いている。(…)ゴゲン・サマ [=権現様] と呼ばれる日本の貴族 [=徳川家康] が、ミカドの世上権を尊重しながら、あるいは、より事実を則した説明をするなら、ミカドに権力の幻影を保持してやりながら、この混乱を収めようとした。

かくしてゴゲン・サマは、ミカドに平行し寄生するタイクン王朝を築いた。そして、国の頂点に虚しく君臨する天皇に君主権という一種の名目上の権利を保持させながら、みずからが権力の実質を握れるように手筈を整えた。このかなり複雑な機構のおかげでタイクンは、かつての同輩で、中には何百万人も臣下を抱える者もあるダイミョーたちの好戦的な本能を制御するのに成功した。

しかし、この特異な専制君主制 —— とはいえ政府は君主のかわりに権力を行使する人物に事欠かなかったわけであるが —— が何物にも乱されないよう、日本は世界の他の国から隔離されることとなり、その君主制は、保護政策が実現しうる限りもっとも完璧な例となっている。しかしながら、ひとつの国民が人類のなかで何の代償もなく孤立集団をなしていることは不可能である。こうして、かつては野蛮だった国々が近代的な進歩へと急速な歩みを遂げているあいだに、日本はいわば、自身の傲慢な無知の中に結晶のようにこり固まっていたのである。

この不思議な帝国の門戸を開放させた栄誉は、アメリカ政府に帰するものである。なぜならオランダ人はほんの少し隙間を開けさせたにすぎなかったからである。ペリー提督の指揮するアメリカの艦隊の出現により警告を受けた日本政府は、他国との相互自由貿易制を開始することで機構を変え、国をよりよい運命に導く途を選んだ。そのおかげで蒸気機関、電気、そしてとりわけ西洋の野蛮人の砲兵組織を学ぶことができた。そして、[西洋の] すべての文明国が、ペリー提督の艦隊の交渉により生み出された教育効果を利用して日本との関係を結んだ。しかしながら、これほど何世紀にもわたり自身の殻に閉じこもっていた文明にいきなり受け入れられた外国人は、必然的に、日本人が侵すべからずと信じ込んでいる多くの馬鹿馬鹿しい偏見にぶつかることになった。

たとえば、ヨーロッパ人やアメリカ人にとっては、ダイミョーの前でこの国の住民と同じように埃にまみれて平伏するなどというのはできない相談だった。日本の重要人物に不敵な視線を投げてその敏感なる威信を傷つけた無礼者を罰するため、家来が剣を抜いたのも1度や2度ではない。それゆえ現在の革命は、じっさい、外国人の存在が必然的に引き起こした論争に端を発しているのである。

6. 神戸事件首謀者の切腹 (1868年5月30日号) 図版⑤

日本からの最新の通信は、日本人が外国人に対して起こした複数の流血の攻撃を報じている。しかしながら、少なくとも本紙の最初の挿絵に描き出される処刑の光景は、この国の政府が、われわれの代表者が要求するいかなる償いも拒みはしないことを示している。

処刑される罪人は、2月4日、兵庫の神戸で外国人に加えられた [備前藩士による] 攻撃の首謀者の武士である。

ミカドの政府が外国代表団の要求に同意したことから、この武士の死刑執行は3月2日兵庫で、信任状を得て日本に派遣されているあらゆる公使館の代表の列席のもとで行われた。

処刑が行われることになっている寺に代表たちが到着すると、椅子に着席させられた。そしてしばらくして、死刑囚の滝善三郎が備前の武士1名、薩摩の武士2名、他に長州の武士2名に付き添われて入場した。兵庫奉行伊藤 [俊輔=博文] がミカドの命により儀式に参列していた。そして証人であると同時に死刑執行人である2人の武士が死刑囚の後に従っていた。

最後の2人のうちの1人は小卓 [=三方] を持っており、その上にはワキザシ、すなわち処刑用の刀が

見えた。2人の武士は腕を剥き出しにし、黒の上衣をまとっていた。死刑囚はそれと反対に、このうえなく優雅な絹の装束をまとっていた。死刑囚と死刑執行人が外国代表団の前にやってき、地面に頭が着くほど丁寧な長いお辞儀をした。

この儀式のあと、滝善三郎は寺の真ん中に行き赤の敷物の上に座った。その両端には大燭台が置かれていた。彼は覚悟を決め、死を恐れていない人物と見えた。彼の表情にはいかなる動揺の印もないように見えた。

座ってからしばしの間身動きひとつせずにはいた後、死刑囚はいくらかの言葉を口にした。それは次のような趣旨だった。

「外国人に対する攻撃を指揮したのは自分ただ一人である。それゆえ切腹をする。(ハラキリだ)ここに列席の方々にはその証人となっていただきたくお願いする次第である。」

死刑囚は装束を脱ぎ、体を下腹部まで剥き出しにした。そして小卓に載せて差し出された短剣を取り、刃を包んでいた紙を静かに外した。そしてためらうことなく、腹にずぶりと突き立てた。

彼が前のめりに倒れようとするとき、彼の横にいた2人の死刑執行人の1人が刀をふるって彼の首を落とした。列席者は皆まだこの光景が生んだ鮮烈な印象から覚めずにいた。そのとき伊藤が外国代表団の前に来て、列強の代表の要求した正当なる倍賞行為が実行された旨を告げた。

いつもどおりの挨拶を交わした後、代表団は寺を出た。そして、日本人たちが彼らの通行に際して敵意の示威行動に出ることもなく、一同は神戸に戻ることができた。

7. ミカドの横須賀製鉄所訪問：開化の第一歩（1872年3月2日号） 図版⑥

われわれは、日本人がヨーロッパ文明をめざして踏み出したもっとも大きな歩みの証人となった。ここに紹介するのはミカドの横須賀製鉄所訪問である。(…)今や第一歩は踏み出され、ミカドは文明の道を歩みはじめた。今回の訪問は横須賀だったが、将来は帝国の別の中枢施設も訪れることだろう。彼はヨーロッパ人によってもたらされたあらゆる利益について理解することだろう。そしてまもなく日本は、自身を停滞させている束縛から解放され、進歩と富にむかって完全に門戸を開くだろう。

*F.L.Verny(1837-1908) が横須賀製鉄所建設の責任者として1865年来日。横須賀・横浜製鉄所の設計原案を作成したのち帰仏して要員を雇い入れ、器材の購入などの指揮を取る。66年に再来日し、製鉄所の長なり、1876年に帰国するまで11年間その任にあった。

8. 大政奉還＝革命（1873年3月29日号）

日本で真の革命が完遂されようとしている。そもそもその革命はまったく穏健なものだが、その結果は間違いなくより実りの多いものとなるだろう。ミカドの政府からヨーロッパに派遣された使節がパリにやってきたときすでに、日本人がいかに聡明かつ迅速にわれわれの習慣や文明をみずからに取り入れたかを見ることできた。(…)断髪とヨーロッパ式衣服の着用を命じるもののように、あまりにも卑屈な模倣精神に基づいたものもあるが、それでも不満なく受容され、几帳面に守られている。周知のとおり、日本の軍隊はフランスの将校で構成される軍事顧問団の世話により完全に再編成された。また、鉄道ならびに電信網の建設がさかんに進められており、すでにいくつかの線が開通している。それゆえこれから数年の後には変貌が完了していることだろう。風趣を好む人々は嘆くかもしれないが、文明化が失うものは何もないのである。

日本人の印象

9. フランス人との共通点 (1857年5月9日号)

この興味深い民族のごく内輪の生活を何度も見て調べた末、われわれは、あらゆる文明化された国民のうちで、フランス人こそは、好みと性格から言って日本人がもっとも相性がよいと感じる国民なのだという確信を得た。知的で活動的、勤勉にして勇敢で活力があり、子供のように陽気で、悪賢くて軽妙、礼儀正しく親切な日本人は、世界の中でもっともフランス人と似たところのある国民のひとつである。

10. 公衆浴場 (1857年5月9日号) 図版 a1

習俗の点から言えば、日本国民は信じられないほど墮落しているように思われた。雑居や近親相姦といった東洋人のもっとも恥ずべき情熱が、風土病と言ってもよいほどの域に達しており、白日のもとに遠慮も恥じらいもなく好まれているのだ。なんといっても公衆浴場では、自ら実行はせずとも自由にその証人になることのできる奇妙な光景を見て、外国人は驚きで打ちのめされる。そこでは、性も年齢も違う様々な人々が50人ほど、大きな部屋に完全に裸で雑然と集っている。老若男女が、いつも隣人のことなど気にもかけずに体を洗っている。部屋の奥にある共同の浴槽でも、浴槽の外でも、隣にいる者に身体をこすってもらったり乾かしてもらったりしている女が見える。その隣人とは知り合いでないことも多いのだ。そして今度は自分が同じようにしてやっている。こちらには若い娘の団がいるが、すぐ近くに若い男たちがいて自分たちをためつすがめつ見たり冗談を言ったりするのも平気である。あちらには子供たちが、さらに遠くにはくる病を罹った老夫婦がいる。つい目をそらし、もっとさわやかな光景へと移してしまう。

11. 同 (1862年8月16日号)

すべての2人組がみな体をこするのに没頭しているので、わたしのとっぴな服装にもかかわらず、誰もわたしが入ってきたことにさえ気づかなかった。そこに来る人は皆、まじめに入浴をしにきているのだ。それゆえ、両性が奇妙に入り混じっていてもいかなる性質の混乱も起きないのである。

12. 祭の印象 (箱館の氏神の祭) (1857年6月20日号) 図版 a2

このようにして3日間はこのうえない興奮と放蕩と大宴会のうちに過ぎた。しかし銘記に値するのは、放縦の極みにあったこの人々全体のなかに、制圧しなければならないような混乱は一つとして起きなかったことだ。どこの国でも、街や田舎の祭や多人数の集まりで、血を見もする口喧嘩や殴り合いで終わらないものが、そうそうあるだろうか？日本人の間では、互いに礼儀正しくすることがあらゆる階級の子供の教育で最も重要な点のひとつになっている。それゆえ、いかなる階級に属していようともどんな状況でも、相互の関係における物腰は非常に物柔らかで、お互いへのいきとどいた配慮が見られる。日本の祭に混乱がないのは、このような事情によるものなのである。

また、すべての人の顔には喜びが読み取れた。彼らが非常に素直に楽しんでいる様子や、祭の道化がふりまくひとつひとつのこっけいな戯言からまきおこる群衆の底抜けに陽気な笑いからすると、酒そのものは、日本人からその性格のもっとも抜きん出た特徴である陽気さを消すことができないのだとわかった。この3日の間にわたしが気づいたことは、それまでに気づいたあらゆる点にも増して、わたしに日本人の相互関係のあり方を評価させることになった。またわたしは、専制的であると同時に馬鹿げて

いる 鎖国政策にこの人々を縛りつけている鎖を打ち砕くことができれば、彼らの性格の中に貴重な可能性を見出すことができるはずだとの確信をさらに強くした。頭が良く勇敢、活動的で、よく働き器用なこの国民がみずからの鎖の重さを感じるならば——その日は遠くはないだろう——、そして外国との関係により彼らが考えることを学んだならば、きわめて暗い闇の中に止まるという条件でしか存続しえない今の仕組みは、すぐさま終わりになるだろう。すでにいく筋かの光がこの闇に差している。旧体制への抵抗とその転覆のために秘密結社が形成され、組織化されている。どんな火花でも、それが灯れば、風通しと光を欠くこの社会の下で密かに穿たれてつつある鉱脈を爆発させる可能性がある。

1 3. 相撲 (1865 年 3 月 18 日号) 図版 a3

この田舎風の棟の下に 10 歳ぐらいの小さなヤクニン〔原注には「高位の武士」とあるが、実際は行司〕がおり、片方の手には群衆に向かって叫ぶ力士の名前の一覧を、もう一方の手には双球の形をした扇〔＝軍配〕を持っていた。彼の前では感嘆の叫びを抑えることができなかった…皆、背が 2 メートル 10 センチ近くあり、雄牛のような首をし、巨大な上半身で、腕と腿はまるで「肥り肉のマコン美女」さながらの彼らは、互いに向き合い、あきれほどじっと身動きせずにいた。——あたかも肉体が精神を吸い尽くしてしまったように見えた。(…)彼らの突き出た腹は水腫症患者の腹のように迫り出し、女性よりも脂肪のついた胸はぶよぶよと垂れ、動きにつれて揺れた。この赤っぽい肉封筒の下にはいかなる筋肉も際立って見えなかった。また、やさ男のように、彼らの誰ひとりとして胸に毛の茂みのある者はなかった。それは単に、栄養の取りすぎによる肥満の極致、柔らかくぶよぶよした脂肪の固まり、いわばストラスブールの鷺鳥かブレスの食用用に太らせた雌鶏だった。(…) 2 人の英雄は——われながらまるでホメロス風の殊勲の話をはじめがごとしだが——10 分間も体を触ったり腿や腕を擦ったりして過ごした後、まるで 2 つの弩砲のように互いをめがけて突進した…圧力の衝撃で肉がぼしんと音をたてた。肌には大きな丸い青痣ができ、2 人の力士は、呆けたような様子で互いに見合いながらふたたび後ろに飛びのいた。それから、重々しく背を向けて桶に近寄り、手を洗った。それからほどなく、また闘いが始まったが、今度はいくぶん様子が違っていた。彼らは互いにつかみかかるような様子をしながら、叫び、真正面からならみ合い、そのままの状態でじっと不動のままであり、両手は折り曲げた膝の上に置いて、鼻と鼻を突き合わせるように向かい合っていた。そして、相変わらず静かなならみ合いが 15 分続いたあと、手を洗いに戻っていくのだった。

II. 異文化日本に対する興味 : ジャポニスムの隆盛

1 4. 1867 年万博 : ジャポニスムの始まり (1867 年 9 月 21 日号) 図版⑦

古くから陶器や翡翠を作りつづけてきた土地が死に絶えようとしているとき、すでに長い歴史を持つ奇抜で興味深い新たな王国が現れ、はじめて登場したときから、芸術家や蒐集家たちを魅了してしまったのである。色彩、優雅さ、多様性、洗練された形、信じられないほど精緻な細工——彼らにはすでにすべてがある。愛好家たちは、古びた偶像崇拜を捨てるか、もしくは勉強なおす必要があるだろう。漆の駕籠からごく小さな盆まで、巨大な水盤からポケット用の小瓶まで、巨大な家具から小箱まで、あるいは巨大な桶から人形の茶碗まで、すべてがどれほどの値段で熱心を買われ、飛ぶように売られているのかを知る必要がある。(…) こうしたすべてがひとつの館にこのうえなく巧みに集められているのだが、展示館自体もまた驚異である。館を支える階段の下に、4 つの入口に向き合うように、黒の地に金の浮き彫りを施し釉薬を塗った陶器製の巨大な壺、竜と植物の奇抜な模様のある青銅の花瓶、古い有

線七宝の巨大な杯など、この世でもっとも美しく古いもののすべてがある。駕籠、輿、長持、香炉、屏風、提灯、—— それから、夢から出てきたような装束の馬上の武士たち...それはユゴーが赤髭王〔神聖ローマ皇帝フリードリヒ 1 世の渾名〕について「覆面をしているが、踵から兜の飾冠まで黄金に包まれた」と述べたごとく、金、緋色、紺青、燃える赤、そしてプリズムのあらゆる色合い、目も眩むようなひらめきに包まれている。続いて陳列ケースには、薄葉紙に描かれた素描、布地の絵柄、金箔、刺繍張りを施した絹布、真珠を散りばめたべっこう、漆器、七宝、象嵌入りの金物細工、きわめて柔らかい蠟に施したかのごとく繊細な細工の翡翠、彫刻を入れた象牙など、あらゆる物質が製品化され、あらゆる原料が本来の性質を加工によって和らげられ、端正とは言わないまでも、少なくとも計り知れないほど独創的で奇抜な展示品となって現われているのだ。そしてさらに、陶器製の塔、打ち出し細工を施した銅の仏塔、帆掛け舟、武具、旗、衣服、耕作用具、敷物、染物など、挙げればきりが無い。しかもそれらは周辺にすぎないのだ。ほんとうの驚異は内部展示室にある。もし究極の陶器とはどのようなものか理解したいと思うならば、この極東の芸術の聖域に一時立ち止まり、いったん幻惑が覚めたら、瞑想し、またあらたにじっと見つめることに没頭することだ。

1 5. フィルマン・ジラルール画『日本女性の化粧』（1873年8月30日号） 図版⑧

日本は長い間未知のまま、土地の住民たちのせいでヨーロッパ人による研究ができない状態にあったが、ついにその日本を訪れ、知ることができるようになった。そこにきわめて古い文明があることがわかったのは驚きであったし、注目すべき芸術作品も見出された。それらは、われわれの古い世界とはまったく別の理念で生み出されたものであり、類まれな器用さで描かれ、しばしば過度とも言えるような完璧な趣味を備えたものである。

1 6. 日本を題材にした連載小説『ヒョットコ』（1874年11月28日号～1875年3月13日号）

《粗筋》

ヨーロッパ文明に惹きつけられた横浜の大商人 Tsjoo は、妻ジングー、娘ヒョットコらの家族を残し、タイクンの使節に加わって渡欧中である。主人のいない家に大名オガサワラー一行がやってきてヒョットコの美しさに目をつけ、横暴な振舞いをする。そこに父 Tsjoo を送り届けにきたフランス人将校ラヴィゾンと使節随行の画家レスパリエが現われ、オガサワラーを恐れもせず、ヒョットコを窮地から救う。二人は Tsjoo 宅に滞在して楽しい一時を過ごす、威信を傷つけられたオガサワラーは復讐を企んでいる。Tsjoo 宅をオガサワラーの妃が訪問し、ヒョットコを城に遣わすように言う。開明派を自認していたはずの父 Tsjoo も母ジングーも、そしてヒョットコさえもがその申し出を喜ぶ。ヒョットコのことを愛しはじめたラヴィゾンは、愛を告白した後任務に就くため Tsjoo の屋敷を後にする。やがて自身の恋心に気付いたヒョットコは苦悩するが、ひたすらしきたりに従うよう教育されてきた母ジングーには娘の気持ちが理解できない。オガサワラーの家来たちが城からやってくると、ヒョットコは恐れをなして逃亡する。Tsjoo 一家は娘の逃亡と外国人とともに革命を企てたという疑いによりオガサワラーの襲撃を受け、家を焼き討ちされる。一家はラヴィゾンの勧めに従いフランス公使館に避難する。一方逃亡して苦難を重ねるヒョットコはレスパリエに救われるが、今度は大君の一味に誘拐される。ラヴィゾンらは彼女を取り戻しに江戸城に乗り込み、大君の説得を試みる。専制君主の典型ともいべき大君は耳を貸そうともしない。が、やがてフランス艦隊の大砲の威力に怯え、即刻日本を立ち去ることを条件にヒョットコ一家を放免する。さらにラヴィゾンは京都で天皇に謁見して改革を進言する。ヒョットコ一家はフランス艦で日本を去るが、やがて明治維新がおこり、ラヴィゾンと結婚したヒョットコをはじめ、一家はそれぞれ幸せに暮す。

「日本の中産階級の町人は、たいていの場合教養があつて頭が良く、金持ちでよく働くが、自分の社会

的地位に関してはきわめてへりくだった考え方をしている。財産を使うにも慎ましくこっそりと、幸せを隠れ家の奥に隠し、信念を持って身を縮め、貴いお方と崇めて呼ぶ侍には惜しげもなく身を屈め跪くことで、実は侍より学もありしばしば金持ちであることの許しを得ようとしている。大領主に踏みつけにされることをごく当然と考えているような愚かな二本差しの侍どもを笑うことさえしない。

しかしながら町人たちは、江戸や京都や横浜の通りでは壁にぴったりと身を寄せて歩き、どんな侍が来てもすぐにひれ伏せるようにいつも背骨を曲げているとしても、木の家に入れば、すくと立って手足を伸ばし、息をつき、誰に脅かされることもない自らの権威や、身のまわりの、ヨーロッパの城主たちさえかなわないような豪華を誇りに思うのである。」(1874.11.28)

「[...] 門が静かに開き、大きな桜の花束を散らした模様の赤い絹のキリモン [=着物] を着た小柄な女が入ってきた。というのは今は春で、日本女性は、西洋では未知の身だしなみの洗練によって、身にまとう着物の布の模様に季節の花をあしらうのである。キリモンは、胴を白の薄布の帯で締め、後で巨大な結び目を作って留めてあった。この見知らぬ女の黒髪は、こめかみの上部を厚い蠟で固め、肩の後で垂らしてあったが、それは間違いなく身分の高い女性の印である。もう一つの際立った特徴として、この女の眉は丹念に抜かれ、そのかわりに黒い弓形の眉が筆でしっかりと描いてあった。

見知らぬ女は、家に入る前に入り口で靴を脱ぐというこの国の習慣に従い、靴を脱ぎ、ただ布製の靴下を履いただけの小さな足でいそいそと歩いて皆のところまでやってきた。」(1874.12.26)

「日本女性の人生は、すべてにおいて単調かつ一律で、見通しのきくものである。一言で言えばそこには自分の意思というものがまったくないのである。子供時代には両親の意思しか知らない。彼女は生まれながらに穏やかで柔順であるうえに、強制、非難、叱責、有無を言わせぬ助言などとは無縁である。(…)日本の少女は、闘うことの魅力を感じたことがなく、ただひとつのこと、すなわち服従しか学んでいない。(…)夫のものなっても、両親のところにいるときと同じように意思のない奴隷であり、自らに課せられた束縛を感じることもすらないのである。生まれながらにこのような特異な条件に置かれることから、日本女性には、根本的に悪い性質が備わるのであり、それがやがてはヨーロッパ人を排斥することにつながっていくのだと思われる。すなわち日本女性には、ヨーロッパの女性の胸に生まれた特別な活力が、そして、女という性の優しさと弱さから主張が控えめになるとしても、いかなる障害があろうとも目標に向かっていくあの意思が、まったくないのである。(…)日本女性の心は、ヨーロッパの女性の心とは違ってふにゃふにゃの味けない練り粉のごとくで、こねる者の手に屈服し、固有の形を持たないものである。」(1875.1.9)

「西洋人よ、と君主は重々しく言った。おまえは重大な間違いをしている。わたしは、日の沈む国の政府や人民のことは熟知している。おまえたちの習慣を知るために海を超えて派遣した者たちの中には、おまえたちのうまい言葉に乗り、おまえたちの文明を見せつけられて虜になってしまった者も少数いる。

[中略]しかしながら、残りの者は皆、忠実にわたしのもとにおまえたちの習慣のことを報告してきた。おまえたちはそれを日本に導入したいと思っているのだろうが、それは日本を破滅させるだろう。おまえたちのところでは、一介の庶民が大君に自分の意思を強要しようとするが、この日本では、もっとも有力な大名でさえ、わたしの前で平伏せずに物の言える者はないし、彼らの命はわたしの思うがままなのだ。おまえたちの習慣は気に入らない。その話はもうやめにしよう。」(1875.2.27)

17. 日本趣味のオペラ『コジキ』(1876年10月28日号) 図版⑨

上の絵は宮殿の玉座の間で、膝をついた廷臣たちがミカドの死を嘆いている。左にいるのは王位継承者のコジキ、右に泣きぬれているのはその婚約者ヌシマである。ヌシマは野心家の総理大臣クシココの娘で、彼は皇帝の義理の父になることを熱望しているが、娘婿のコジキのことは眼中にない。というのは皇子はじつは皇女だからだ。コジキはほんとうの名はコジカルで、中央の大きな団扇形の中に描かれている絵が示すように、まったく女性魅力を備えている。彼女は曲芸師フィゾに夢中になる。そして王位を追われ、下の左側の絵が示すごとく、彼とともに街の広場で曲芸をするようになる。芸は刀〔手裏剣〕投げだが、それが結末をもたらすことになる。その右横の絵を参照されたい。フィゾは亡き皇帝の息子であることが判明する。かくしてコジカも、以後末永く皇帝を飾るこのうえなく美しい花として、帝室に返り咲くのである。以上。

18. 美術を通しての日本理解：ルイ・ゴンス著『日本美術』(1883年11月17日号) 図版⑩

周知のとおり日本人は装飾に卓越した能力を示す。彼らは何よりも、生き生きとした描写と動き、それに簡潔化の才を天から授かっている。彼らは様々な種類のものの一般的な性質を描き出すのに優れており、もっとも大胆な意匠の中にあっても、生き物の場合でも静物の場合でも、常に自然に対する感情に忠実である。

19. 盆栽 (1889年6月8日号) 図版⑪

じっさいそれらは木々のミニチュアである。より正確に言えば、ミニチュアにされた木々である。とにかくそばによってさらによく見てみるのだ...ひとつひとつの鉢に張りつけられたラベルを読んだとき、驚きを通り越して啞然としてしまう。目の前にあるその小さな木は、すでに年老いているのである。70歳を越しているだ。だがこれは序の口で、さらに進むと、90歳の木もあれば、100歳を越えた木もある。150歳になる木も何本もある。(..) この小さく変形した奇妙なものに対する趣味は、われわれを驚かすには足りない。なぜならそれは、建築や美術における日本の傾向についてわれわれが承知していることとよく合致しているからだ。日本人は大きなもの、壮大なものは理解もしないし求めもしない。彼らの手に落ちると、自然そのものに至るまで、あらゆるものが小さくなり、縮小され

III. 近代国家日本への評価と批判

* 1894～95年 日清戦争 図版⑬～⑭

20. 脅威か単なる摸倣か：フランス軍事顧問団と日本陸軍 (1894年8月18日号)

およそ30年前から懸命にヨーロッパの摸倣をしている極東の特異な小国の民が、究極の体験によってみずからの成せる業を確固たるものにしようとしている。つまりこの国は、最新のきわめて科学的な戦争の手續きを通じて、近隣の何十万もの人々を根絶やしにしながら、「文明」大国の肩書きを恒久的にわがものにしようとしているのである。

今日は読者に日本の陸軍についての専門的研究を紹介しよう。莫大な努力と金を費やして創立されたこの奇妙な機構は日本の勝利とアジアの均衡の中でのその優越性を保証することになるにちがいない！

「閱兵式の日、騎馬姿に出会ったなら、日本軍の将校は非の打ちどころがないように見えるだろう。

じっさい彼は勇敢で強く、規律正しい。しかしながら、演習のときの彼を見たまえ。そうすればすぐに、彼の知識がせいぜい酒保の女経営者の裁縫用の指貫ほどのものでしかないことがわかるだろう。理論を熟知してはいるが、熟知といってもそれはいわば、蓄音機を繰り返し聴いているようなものであり、彼はいわば正月用のおもちゃのような動き方をする模型機械なのだ。礼儀正しく、正確で、おもしろい... ネジが壊れるまでは。

何年前か、わが国の将校の訓練を受けていたときには、まだ日本軍に幻想を抱くこともできた。

ドイツ化されてからというもの、それはまるで堅苦しく規則的に歩く小さな鉛の兵隊の集団のようになってしまう、日本武士が生まれつき持っていた美点はなくなりつつある。(...)彼らは戦争に慣れていないし、これからもまだ長くその状態に留まるだろう。というのも、彼らはなかなか中国に上陸しようとしないうし、中国もまた日本に侵攻しようとしないうからである。

それではなぜ、財政に重い負担をかける常備軍が必要なのか？この質問をしたなら日本軍の将校は、軽蔑したように笑って答えるだろう、「立派な軍隊を持たない国が大国と言えるでしょうか？見てごらんさい、フランス、ドイツ、ロシア...」と。理由もなく、有用性も関係なく、いつも摸倣の精神が幅をきかせているのである。(..) 日本人は、結局摸倣は創造だと考えており、剽窃家でありながらみずから発明家と名乗っているのである。

先日ある日本人将校がわたしに言った、「我々はまもなくあらゆる点についてあなたがたより強くなりますよ、なにしろ、交渉をもった文明のなかから精髓のみを取り入れているのですから。たとえば軍事については、フランスならびにその他の国々のなかで最上のもを取り入れました。長靴はオーストリア製、制服はフランス製、ケピ帽はドイツ製...」

21. 日清戦争における日本軍の活躍（1894年12月8日号）

日本は先の11月21日、旅順の耀かしい戦勝により、すでに中国から勝ち取っていた一連の勝利を不動のものとした。

ミカドの軍隊の1万8000人の兵士は、9人の将軍と総督に率いられた同数の清国軍に守られたこの堅固な基地を2日間で占領してしまった。

ミカドの侵略軍の3大隊のうちの1つの司令官を一時的に務めることになった陸軍大臣大山大将・伯爵の指揮のもとで日本陸軍が旅順港の清国側のあらゆる陣地を次々と占領する一方、伊東提督の艦隊は海上から同地の包囲を固めていた。

この戦闘の目撃者となったポアパス号のある英国将校は、日本軍の勇敢さと動きならびに射撃の正確さを賞賛している。彼によれば日本軍は、ヨーロッパ軍に比べてもまったく遜色のない軍隊だということである。

ある意味で戦闘の成功を決定づけると言える旅順港の占領は、近代的な強国としての日本の力量を他に知らしめるものだった。

22. 日本人の表と裏 —— 根強い反欧主義（1895年11月16日号）

結局日本には、見せかけの日本と、隠された日本という二つの面があるのだ。

前者は、陳列用の商品見本のように飾りたてられた日本である。それを広める方法も気前良く整えられている。そのおかげで国庫はかなり潤っている。土地の住民たちは善意の仲介をしながらいそいそとしてそれを見せようとする。(..)

しかしながら、御殿が寄り集まったようなアメリカ風のホテルや、「画趣豊かな風景」に囲まれた寺を巡る間、旅行者が個人の住宅として見るのは、イギリス人やアメリカ人、もしくは「異人」のところで習い覚えるかどこかのアングロ・サクソン人と結婚して白人もどきになった日本人によって経営される「みやげ物」店ばかりである。旅行者が見るのは過去のものだけ、そしてそれはまったく滅んでしまったものなのだ。

一方、現代の日本の生活については、クルマヤ（人力車）に揺られていく途中、わずかにその外側の様子をちらりと見られるだけである。日本の小家屋は、白い紙で覆われすべり溝[=敷居]をすべらせて閉める軽い木の格子戸[=障子]や、ヴェランダ[=縁側]の前に降ろされた長いスダレ（細い竹片で作った日よけ）の影に隠れて、中を見通すことができない。人々の見せる顔はツゲかマホガニーのように堅く、額すれすれのところにある瞼[西洋人とちがって彫りが深くないことを意味する]が、店を閉めるときに店頭にたてかける薄板のごとく、細い目の裂け目を閉じるべく下がっていき、ケトウジン（野蛮人、外国人）に語りかけるものといつては、生垣のように並んだ歯と笑うときに浮かぶ切れ切れの皺ばかりなのである。それを歓迎の印と思うのは、馬鹿正直か、日本に来たばかりの者だけである。

ところで、そうしたスダレや閉じられた瞼の陰に、ほんとうの日本人、つまり、極東における白人の通商や影響を廃絶することを夢見、その準備をしている日本人が隠されているのである。

公式には、封建制は 1867 年に廃止された。以来、一連の勅令が出て、宮廷や政治・行政生活においては昔ながらの服装や習慣にかわってヨーロッパの服装や習慣が採用されるようになった...しかしながら、勅令の文言がいかにも有無を言わせぬものであっても、すでに第二の本性になってしまった習慣や、既得権の行使から生まれる利益を反古にするほどの力はないのである。

理論上は、天皇によって人格化された国家の定めるところにより、すべての者が平等になった。人々の差異は、生まれつき持っている能力が不平等であることから生じるもののみになった。しかし実際には、弱き人間たちに、もっとも大切なものを失った痛手を慰める代償が残されることになった。

[新政府は、既得権者に対して]公然のあるいは形を変えた[既得権の]奪取を行なって新秩序に対する妥協なき敵を作るかわりに、即時の賠償や年金を与えることで封建時代のあらゆる財産を買い取った。また、不信や単なる嫉妬によりかつての上流階級[=旧武家]を遠ざけて国に仕えさせないようにするかわりに、サムライを陸・海軍や警察にも迎え入れ、彼らはそこで嬉々として刀を持ち、その能力は邪魔になるどころか役に立っている。ダイミョー（封建領主）はトクガワ氏（ショウグンの一族）も含めて高級官僚になり、1890 年からは上院議員になっている。しかしながら、彼らの同僚や上司としては下級士族が多数登用された。彼らは能力や成し遂げた任務によって貴族の地位を授けられ、自らの思いがけない栄光を保証してくれる新しい政治体制を厳格に維持しようとしている。

それ以上のことがある。古い身分制度が公然と生き残ったのである。帝国の内閣により出版された『帝国統計年鑑』（1895）は、カゾク（貴族）、シゾクあるいはサムライ（戦士）ならびにヘイミン（普通の人々）の数を発表している。ということは、旧体制は廃止されたが温存されているとも、温存されているが廃止されたとも、好きなように解釈できるのである。

ヨーロッパ風の服装をするのは、宮廷で職務を遂行する上・中級官吏か、または、開港された港にいる限られた商人か、あるいは公共の場に出るときに限られる。皆家に帰るとすぐに玄関で靴を脱いでタタミ（ゴザ）の上を歩き、チョッキやズボンやフロックコートを脱いでキモノに着替え、四角の布[=座布団]の上に仕立て屋のようにあぐらをかいて座り[昔の仕立て屋があぐらをかいてすわっていたことか

ら]、2本の小さな棒を使って食事をし、タタミの上でフトン（掛布）を着て寝る。大衆は自分でてんで選んだ服装をする。ひたすら頬骨だけが目立つ菱形の顔の上にわれわれの帽子を被ったり、腰の張っていない体にヨーロッパ風の服を着たりすることのこのうえない滑稽さや、始終靴を脱いでいる人間が靴を履くという不便さを認めながら、やわらかいフェルト帽や、かんかん帽や、蛇腹帽や毛皮の帽子を被り、キモノの上からケープ状のオーバー外套を羽織り、タビを履き、ゲタと呼ばれ、地上から約10センチも高くなっている一種の板を親指と人差し指にはさんだ又=[鼻緒]でぶら下げるといような[ちぐはぐな]格好をしている者たちがいる。そんな連中にかぎって、慣れ親しんだ服装になってくつろぐとヨーロッパのことをこき下ろしたがるのである。祝典の日には、小さな虫眼鏡そっくりの大きなレンズがついた青や黒や緑の眼鏡を鼻に掛け、礼服や手袋や深靴で着飾るが、借り物の衣装をまとったようだ。

上流階級は、みずからの特権の行使を保証し持続してくれるものは何でも守ろうとする人々で、家庭生活の面では純日本的な過去への回帰が目立つ。世の動きを予見するのは彼らの役割であるが、彼らは、古いしきたりのうち、長らく続いてきたからこそ、日本が必要とする新たな骨格を堅固な脊椎のごとく支えるのに役立ちそうだと思うものは、すべて維持しようとしている。しかしながら彼らの保守主義は中流階級の道徳観念のない実用主義によって打ち負かされる。それで彼らは躍起になって、下の身分の者たちに、国民生活の新しい原則を理解したり取り入れたりしないようにさせるのである。

ゆえに日本は、その小さな家々と同じように、土台がほとんどない柱の区画の上にレンガの階と切り石の階を積み重ねてできる建物に似ている。

彼らは極東の「プロイセン」の役を演じようとしたばかりであり、「汎黄主義」を夢見ている。彼らが渴望する獲物は彼らの手の届くところにあり、その渴望を維持するに十分脆弱な状態にある。それは日本にとって[イギリスが植民地化した]「インド」に等しいものである。獲物を自在に操る日本は、アジア式「モンロー主義」[=他の列強の不干渉を主張するかたわらで自国の権益を確実なものにしていくという意味]を強制するすべを持つことになろう。今はまだその力はないが、日本は期が熟するのを待つだろう。そして、その変わることのない執拗な渴望を紛らわすものは何もないだろう。ところで、中国の分割からは世界的な紛争が生まれるだろう。それゆえ、いわば「黄色の危険」[黄禍、黄色人種が引き起こす危険]が懸念される。そしてその危機は、日本にあるのである。

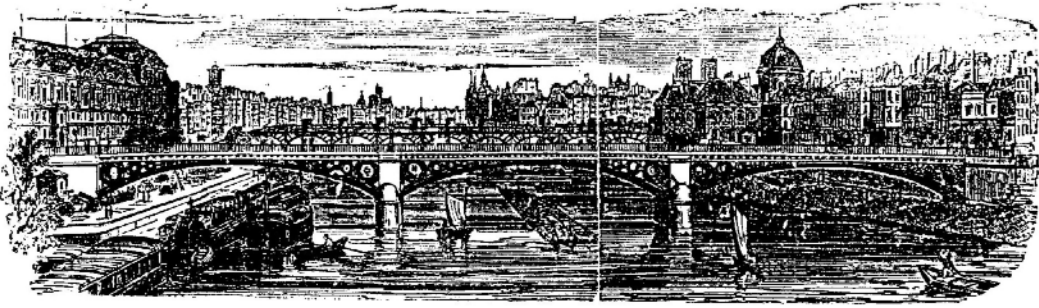
23. 義和団の乱と北京の連合軍 (1900年11月10日号) 図版⑩

われわれの真の救済者はミカドの軍隊である。(…) 7月14日の天津占領後は、北京を包囲しつつ、巧妙に進軍することが必要になった。それには4万人の兵力が必要とされ、9月6日もしくは7日より前の作戦開始は不可能とされていた。もしそのとおりにしていたなら、われわれの救援軍が北京に着いたときには3週間の遅れがひびき、占拠された公使館の残骸がいくつか残るのみとなっていたことだろう。連合軍は、強力な陣地から敵を撤退させるために、北倉攻撃に際して、あまり早急に事を進めはしないつもりだった。8月5日の栄光は、アメリカ軍と、とりわけ日本軍によるものである。彼らは、皆の賞賛的となる激しさをもって敵の戦線を正面から攻撃した。その間にフレイ將軍は、一握りの陸戦隊兵士と優秀きわまりない砲兵隊を率い、巧妙な作戦で中国人を背後から攪乱し、西方へと敗走させていた。(…) 勝利の翌日、日本軍は、北京進軍の準備は整っており、果敢に戦えば1万人程度の兵力で攻

略可能であると宣言した。さらに、もし他国が後に続こうとしないならば、独力でも公使館の救済に向かうとの旨をつけ加えた。実を言えば、誰もが北京に一番乗りしたいと考えていた。かくして、あまりに急ぐのでほとんど敗走と見まがうほどの「ラッシュ」が始まり、8月14日、連合軍は首都に入った。一番はじめにセポイ [=昔の英、仏、ポルトガル軍内のインド人兵士] の部隊が、大使館付陸軍武官、柴大佐 [実は中佐] に教えられた道 (その道とは下水道だった!) を通って侵入した。

L'ILLUSTRATION,

JOURNAL UNIVERSEL.



Ab. pour Paris. — 5 mois, 4 fr. — 6 mois, 4 fr. — Un an, 8 fr.
Prix de chaque N^o, 75c. — La collection mensuelle br., 3 fr. 75.

N^o 1. Vol. I. — SAMEDI 4 MARS 1845.
Bordeaux, rue de Seine, 55. — Réimprimé.

Ab. pour les Dep. — 5 mois, 9 fr. — 6 mois, 4 fr. — Un an, 8 fr.
pour l'étranger. — 10 — 10 — 10

SOMMAIRE.

Notre but. — Le Gouverneur des Iles Marquises. Portrait du capitaine Bruat; Maison en bois qui doit être transportée aux Iles Marquises. — Le Curé suédois, nouvelle, par E. Legoué. — Nouvelles diverses. Trois Gravures. — Sauvetage du Tétémaque. Deux Gravures. — Revue des Tribunaux. Quatre Gravures. — Chronique musicale. — Une Fleur, romance. — La duchesse d'Orléans. Portrait. — Epaves. — Frenouille du Bonfrais. Une Gravure. — Revue des Théâtres. Une scène des Deux-Ans. — Bulletin bibliographique. — Université. — Annuaire. — Manuscrit de Napoléon. — Modes. Une Gravure. — Bulletin commercial. — Bébas.

NOTRE BUT.

Puisque le goût du siècle a relevé le mot *Illustration*, prenons-le; nous nous en servirons pour caractériser un nouveau mode de la presse nouvelle.

Ce que veut ardemment le public aujourd'hui, ce qu'il demande avant tout le reste, c'est d'être mis aussi étroitement que possible au courant de ce qui se passe. Les journaux sont-ils en état de satisfaire ce désir avec les récits courts et incomplets auxquels ils sont naturellement obligés de s'en tenir? C'est ce qui ne paraît pas. Ils ne parviennent le plus souvent à faire entendre les choses que vaguement, tandis qu'il faudrait si bien les entendre que chacun s'imagine les avoir vues. N'y a-t-il donc aucun moyen dont la presse puisse s'enrichir, pour mieux atteindre son but sur ce point? Oui, il y en a un; c'est un moyen ancien, longtemps négligé, mais héroïque, et c'est de ne moyen que nous prétendons nous servir: le lecteur, vous venez de nommer la gravure sur bois.

L'essor extraordinaire qu'a pris depuis quelques années l'emploi de ce genre d'illustration semble l'indire d'un immense avenir. L'imprimerie n'a plus seulement pour fonction de multiplier les textes; on lui demande de peindre au même temps qu'elle écrit. Les livres ne paraissent plus qu'à moitié, si le genre de l'artiste, s'inspirant de celui de l'écrivain, ne nous traduit leurs récits en brillantes images, et l'on dirait qu'il en est désormais de toute littérature descriptive comme de celle du théâtre, que l'on ne connaît bien qu'après l'avoir vu représenté. Pourquoi donc cette association si heureuse du dessin avec les signes ordinaires du langage ne s'étendrait-elle pas hors des bornes dans lesquelles elle s'est contenue jusqu'ici? Pourquoi ne ferait-elle pas irruption hors des livres? Ce mouvement n'est-il pas même déjà commencé par les revues désignées sous le nom de *pittoresques*? Nous ne faisons donc que la continuer en lui imprimant ici une nouvelle direction; et en nous hasardant à lui ouvrir la carrière du *manuscrit*, nous ne doutons pas de réussir, car il est évident que nulle part il n'est susceptible de porter de meilleurs fruits.

Les recueils pittoresques ne sont au fond que des livres composés d'articles variés, et peuples feuille à feuille. C'est donc sur un terrain tout différent et vierge jusqu'à ce jour que nous prétendons nous placer. Puisque la bibliologie pittoresque est fondée, et que la librairie n'a plus à cet égard que des perfectionnements matériels à chercher, fondez d'un autre côté un nouveau, et laissez désormais des journaux qui sachent frapper les yeux par les formes solides de l'art.

Quel est son objet? S'inspirera-t-il de savoir comment nous sommes soutenus au jour le jour? Nous demandons sur quels chapitres un journal à l'usage d'illustration s'ouvrira-t-il que nous allons être réduits aux monuments, aux sites généraux d'histoire, au respectif, et qu'en définitive nous ne serons différenciés que par les dimensions du format des revues du même genre qui existent déjà? Il nous est trop facile de le répondre.

Toutes les nouvelles de la paix, de la guerre, de l'industrie, des bureaux, du théâtre, des beaux-arts, de la mode dans le costume et dans l'ameublement, sont de notre ressort. Qu'on se fasse idée de tout ce que nous avons de dessins de toute espèce en

tel bagage. Loin de craindre la disette, nous craignons plutôt l'encoulement et la surcharge.

La plupart du temps il est impossible, en lisant un journal, de se faire une idée nette de ce dont il est question, parce qu'il serait nécessaire pour cela d'avoir sous les yeux une carte géographique et qu'il serait trop long d'en chercher une. Que l'on n'imprime dix colonnes sur les terrains en litige entre l'Angleterre et les Etats-Unis, j'aurai plutôt compris avec dix lignes, si l'on a eu soin d'y accolé une carte précise du pays. Cette carte est la pièce essentielle du procès, et faite de la posséder tout demeure renfermé. Il faut en dire autant de toutes les nouvelles politiques qui se rapportent à des contrées éloignées. Qui ferait profession d'être assez versé dans la géographie pour suivre sans difficulté, sur les récits abrégés des journaux, les mouvements des armées de l'Afghanistan, dans l'Inde, dans la Chine, dans le Caucase, même dans l'Algérie? Nous complétons donc notre texte par des cartes toutes les fois que les cartes lui seront utiles. Voilà un genre d'illustration dont personne ne contestera la convenance; mais ce n'est pas assez; les cartes ont par elles-mêmes quelque chose de trop sec et de trop peu vivant. Au moyen de correspondances, et, quand il le faudra, de voyages, nous les soumettrons par les vues des villes, des marches d'armées, des flottes, des batailles. Qui n'éprouvera une joie plus vive en voyant les faits d'armes de nos frères d'Algérie retracés d'après nature, au milieu de ces sauvages montagnards, devant ces hordes barbares, au milieu de ces ruines romaines, qu'en les lisant simplement dans les bulletins?

La Biographie nous offre une large scène. Nous voulons qu'avant peu il n'y ait pas en Europe un seul personnage, ministre, orateur, poète, général, ou non capitaine, à quelque titre que ce soit, de retour dans le public, qui n'ait payé à notre journal le tribut de son portrait. Qui ne sait que l'on comprend mieux le langage et les actions d'un homme quand on a vu ses traits? C'est un instinct de notre nature qu'il nous semble avoir un commencement de connaissance avec les gens, du jour où nous connaissons leur figure. Même nous entendons le point nous borner aux figures isolées, et les scènes souvent si passionnées et si vives des assemblées délibérantes, non seulement en France, mais en Espagne, en Angleterre, partout où la exécutif officielle des Etats se marque à la vue, ces étourdis *meeting* de la démocratie d'outre-mer, enfin toutes les grandes cérémonies publiques ou religieuses, auront leur place toutes les fois que l'occasion en sera digne.

Arrivons tout de suite au théâtre: ici notre affaire, au lieu d'analyser simplement les pièces, est de les peindre. Costumes des acteurs, groupes et décorations dans les scènes principales, ballets, danses, tout ce qui appartient à cet art où la jouissance des yeux tient une si grande place; Français, Opéra, Opéra-Comique, petits théâtres, tout et de toutes parts viendra se réfléchir dans nos compléments, et nous tâcherons de les illustrer si bien, que les lecteurs, s'il se peut, soient forcés de nous faire reproche de nous mettre en concurrence avec eux, en donnant d'après eux à nos lecteurs de vrais spectacles dans un feuillet.

On peut bien que nous ne nous foyons pas fait d'introduire aussi nos lecteurs aux expositions de peinture; c'est là que nous triomphons. Nous ne nous contentons pas de d'annoncer, comme les autres journaux, des jugements tout nus, auxquels l'immense majorité du public, celui de l'étranger et des départements, n'a le plus souvent rien à voir ni à valoir. A côté du jugement, nous aurons soin de donner les pièces sur lesquelles il se fonde, et, sans avoir besoin de se déplacer, tout le monde pourra se faire un compte de ces morceaux qui, chaque année, attirent le plus l'attention.

Enfin, la vie courante fournira d'événements qui tendront sous notre loi; nous ne parlons pas de l'extraordinaire, les choses de tous les jours nous suffisent, et il y en a malheureusement que trop, soit dans les affaires judiciaires, soit dans un catalogue d'usage dans les journaux sous le nom de faits divers, qui, par leur importance désastreuse, détaillent que le crayon les reproduise exactement à l'esprit. Qui n'aurait voulu plaquer un instant à son balcon sur tout de grandes villes en proie, ces dévotions annuelles, à l'insolite? qui n'aurait été curieux de la vue de ce terrible Rhin remplissant le plan de Tarascon comme un lac en mouvement, ou transbordant l'Escaut en une vendue? qui ne voudrait se représenter la mer durant les campagnes de nos vaisseaux dans les ports de nos côtes, les vaisseaux à la voile, les sautes-fêtes, les désolations des rivages? Et comment tout indiquer tout? Les voyages de découverte, les scènes des pays limités, les colonies, les armées européennes, même les chemins de fer qui vont s'élever, et dont nous sommes avec son la construction

sur les points où elle présentera aux regards quelque chose de si singulier, soit de grandiose.

Nous terminerons notre programme par un mot sur les modes. Il ne s'agit pas seulement de celles du costume, que nous ne négligerons cependant pas; il s'agit aussi pour nous de ces modes d'ameublement qui tiennent de si près à l'art et qui ont porté si haut la gloire de la France; bronze, carrosserie, ébénisterie, orfèvrerie, bijouterie, toutes ces branches brillantes de l'industrie parisienne ne peuvent dans nos colonnes la place qui leur est due, et nous serions peut-être à accélérer la dispersion dans le monde de ces innombrables essais de formes riches, élégantes, destinées à l'embellissement de tout d'usages de la vie, et qui étendent sur le monde l'empire de notre patrie comme il s'y est longtemps étendu par la seule force du langage.

En voilà assez pour marquer ce que nous voulons faire, et peut-être pour inspirer le désir de le voir. Concluons donc cette préface, et commençons notre œuvre en priant le public, qui vient d'en entrevoir les difficultés, de ne point s'étonner si nous ne nous levons que progressivement à la hauteur du service nouveau que nous ne craignons pas d'embrasser.

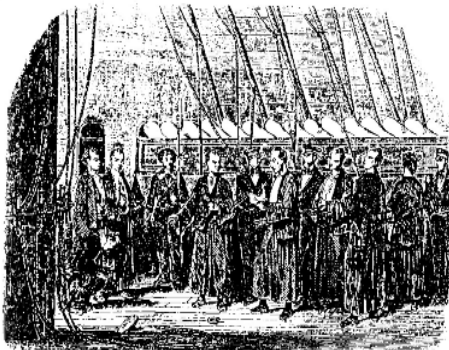
Le Gouverneur des Iles Marquises.



(Le capitaine Bruat, gouverneur des Iles Marquises.)

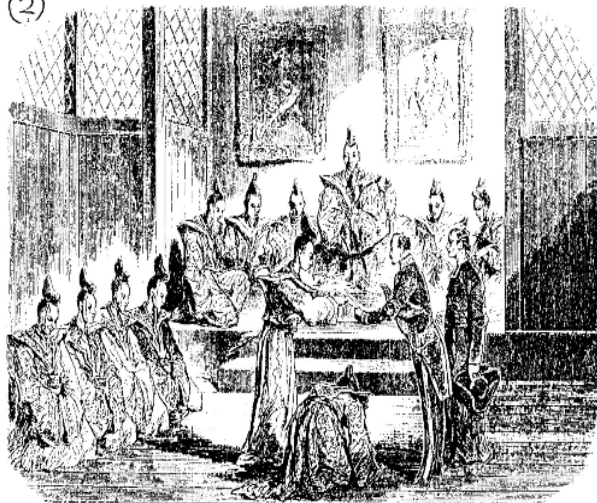
Armand Bruat, né en Alsace, doit avoir de quarante-cinq à quarante-six ans. Il entra au service en 1811, à bord

①



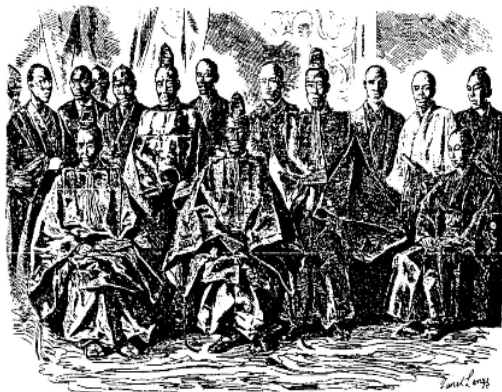
① ヴィルジニー号艦上で役人に命令を出す奉行所の一等書記官
(1856年1月19日号)

②



② フランス総領事・代理公使
デュシェーヌ・ド・ベルケール氏の大君謁見(1860年9月6日)
(1860年12月29日号)

③



③ パリを訪れた日本使節 左から随行員、副使 松平石見守、副書記 柴田作太郎、
正使 竹内下野守、正書記 京極能登守、随行員、通訳

(1862年2月26日号)

④



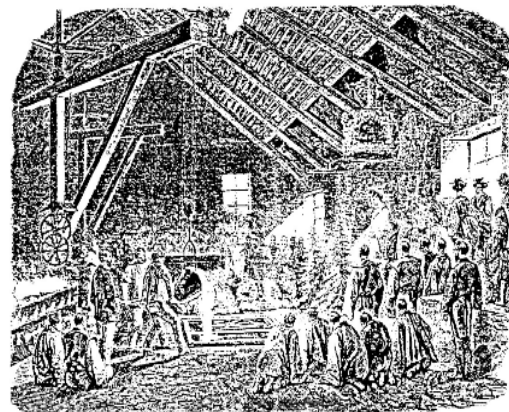
④ 江戸 臨厚蒲田の火事
(1868年3月21日号)

⑤



⑤ 神戸の外国人誘拐事件(1868年3月2日)の首謀者の処刑
(1868年5月30日号)

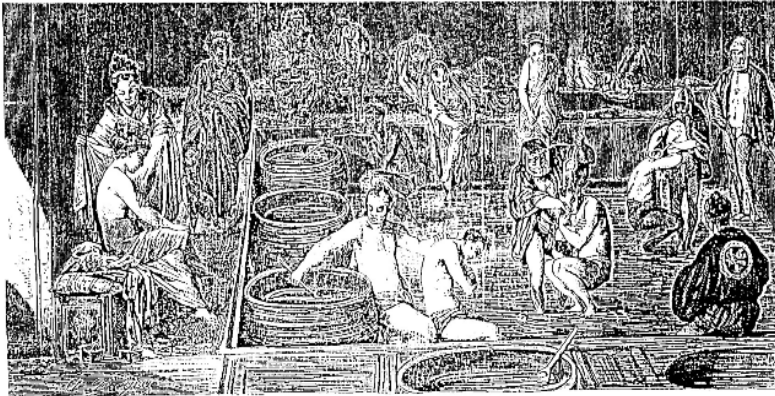
⑥



⑥ ミカドの横須賀製鉄所訪問——紡造所(ケニグ氏のスケッチより)

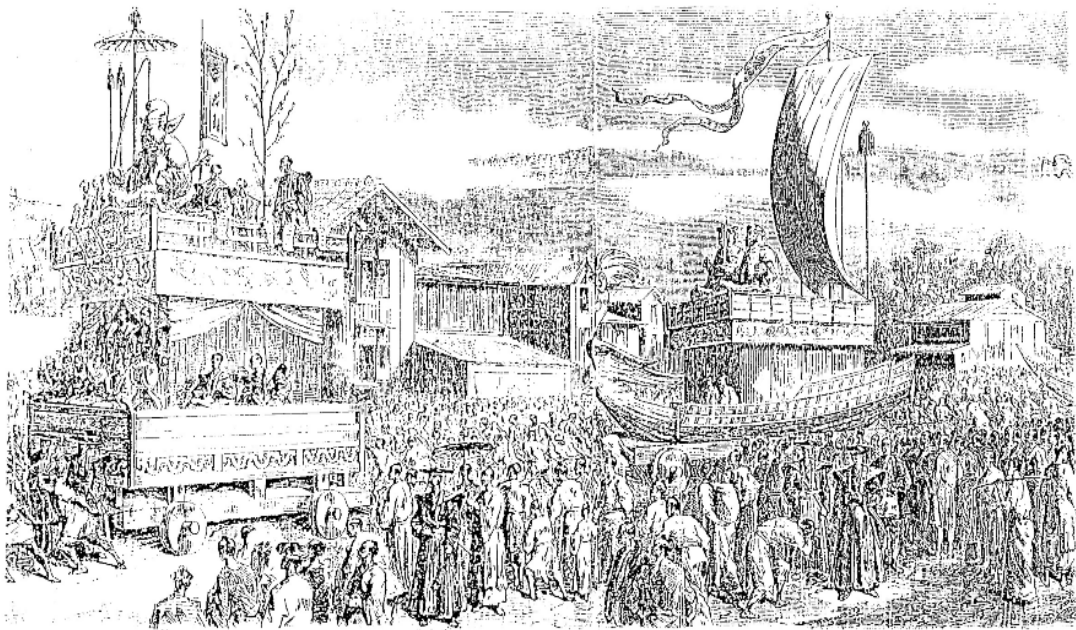
(1872年3月21日号)

a1



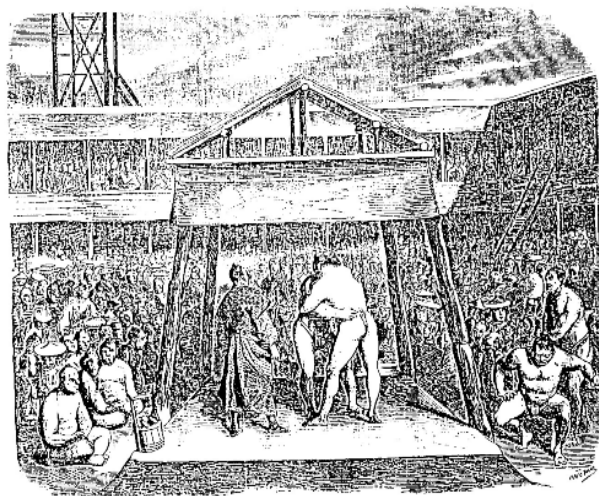
(1857年5月9日号)

a2



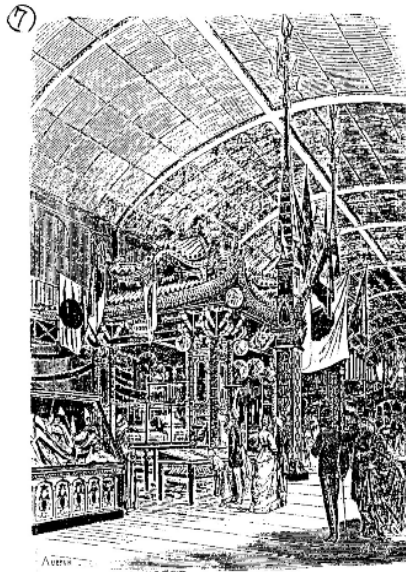
↑
(1857年6月20日号)

a3



(1865年3月18日号)

→



万国博覧会 機械展示室 日本の部
(1867年9月21日号)



日本女性の化粧(フィルマン・ジラール氏の絵画より)
(1873年8月30日号)

(ルイ・ゴンス『日本美術』(カンタン社)より)



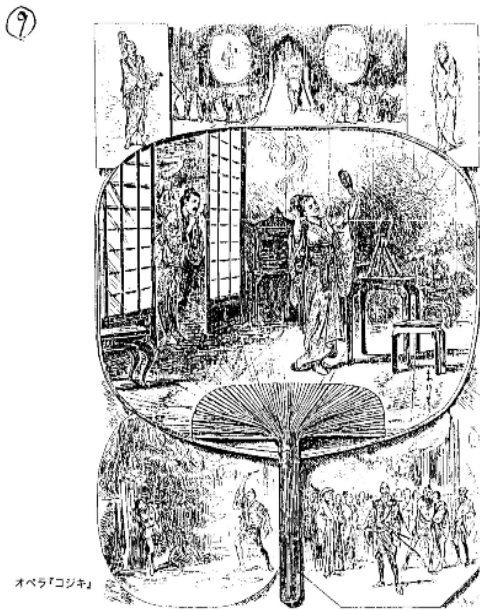
太陽の神天照(北斎画より)



車大工(北斎画)



日本の職人(北斎画より)

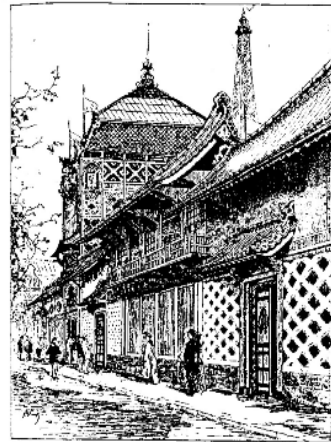


オペラ「コジキ」

↑
(1876年10月28日号)

(1883年
11月17日号)

②



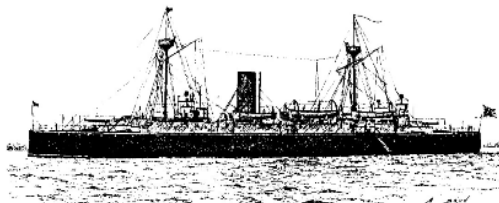
分博(89) 日本館の正面
(1889年10月5日号)



日本の小びとの松の木(盆栽) 樹齢150年

(1889年6月8日号) →

(13)



巡洋艦 浪速

(1894年8月11日号)

(14)



元帥山縣伯勇 日本陸軍総司令官

伊藤治爵閣下 樞密院議長

オープンハイマー兄弟提供の写真より

(1894年9月29日号)

(16)



渤海湾内の旅順港全景 (左から 港湾管理棟、西堡壘、作業所、乾ドック、砲台、砲台、マスト設置機、海軍工廠、南堡壘)

(1894年12月8日号)

(17)



北京外国公使館の真の救済者たち

(前列) 左から小原輝重中佐、柴陸軍大佐、山口陸軍中尉、原田陸軍中佐、イシノ陸軍中佐

(1900年11月10日)

(15)



1867年以降の日本軍の変遷 (オープンハイマー兄弟提供の日本の水彩画の複製)

(1894年9月29日号)

(18)



ロイ・フラー劇場の日本人一巻— ゲイシャの死

(1900年9月8日号)

ギメ著、レガメー画『日本散策』 (1877年12月15日号)

『日本散策』、これはシャルバンティエ社が最近刊行した、非常におもしろく示唆に富む書物の題名である。著者はエミール・ギメ氏、挿絵はフェリックス・レガメー氏による。

ギメ氏とレガメー氏は、われわれの興味をそそる、すばらしい日本という国を、可能なかぎり最良の条件で見てもわるという幸運に恵まれた。それは現在でも、この国ではかなり稀なことである。二人の旅人は毎日、さらに言うなれば毎時間、一方はペンで、他方はデッサン用の鉛筆で、あらゆる種類の印象を記録していった。そしてそれをうまく組み合わせ、別々に見、感じたことを一つにまとめて発表したのだ。

二人の友はいたるところに赴いた。彼らはわれわれを横浜の活気ある通りへと誘い、この国独自のサンパン¹すなわちホテルのボーイ、コンプラドールすなわち仲買人、ジンリキすなわち日本の運送業者〔馬子〕をすばやく捉え、ありのままの姿をわれわれに見せてくれる。それから散策者たちはわれわれを聖なるフジ・ヤマへと案内し、多数の偶像と神々、そして僧侶の世界をすべて見せてくれる。それは幻想的であると同時に現実の光景であるが、事実であるだけになおさらまったく信じられないような世界である。

鎌倉は〔源〕頼朝の揺籃の地である。彼はいわば日本のアキレウス〔ギリシア神話の英雄〕で、伝説の人のように見えるが正真正銘の實在の人物である。鎌倉では大仏という偶像の内部を探ることになる。この巨大な仏陀は、ギメ氏のエスプリの効いた表現によれば、「腹の中にオリンポス山がすっぽり入った」ようなものである。

そして、聖なる島江ノ島での楽しい滞在の後には、このうえなく奇妙で興味を引かれる芝居〔港座で上演された『重の井』〕を見物することになる。変化に富んだこれら一つひとつのものは、すべてまったく真実なのだ。要するにこれは、誰でもわずかな費用で日本帝国一周ができるすばらしい機会なのだ。

← 19 ↓



日本の運送人 Djunki (馬子) (ギメ著『日本散策』より)

20



日本における社会的・宗教的改革—— 障子ごしに会談を聴く僧侶たち

(1877年 2月10日号)

21



ギメ博物館 (11月20日開館、パリ、イエナ広場) の内部および外観

(1889年11月23日号) →



法政大学イノベーション・マネジメント研究センター
The Research Institute for Innovation Management, HOSEI UNIVERSITY

〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1
TEL: 03(3264)9420 FAX: 03(3264)4690
URL: <http://www.hosei.ac.jp/fujimi/riim/>
E-mail: cbir@adm.hosei.ac.jp

複製無断転載